

# パウロの ヘブル人への手紙

<https://ichthys.com/Hebrews-intro.htm>

ロバート・D・ルギンビル博士著

## 序 論





# パウロのヘブル人への手紙

<https://ichthys.com/Hebrews-intro.htm>

ロバート・D・ルギンビル博士著

## 序論

### 内容

|                          |    |
|--------------------------|----|
| はじめに .....               | 1  |
| I. 誰がヘブル書を書いたのか? .....   | 3  |
| 1. 強調 .....              | 3  |
| 2. 文体 .....              | 4  |
| 3. 匿名性 .....             | 9  |
| 4. ヘブル 2 章 3 節の反論 .....  | 10 |
| 5. パウロ自筆の肯定的な証拠 .....    | 12 |
| II. ヘブル人への手紙の年代と時期 ..... | 14 |
| III. ヘブル人への手紙の背景 .....   | 20 |
| IV. ヘブル人への手紙の概要と意識 ..... | 27 |

### はじめに

パウロの『エペソ人への手紙』は、しばしば「彼の書簡の女王」と呼ばれます。もしそれがそうであるならば、この筆者の見解では『ヘブル人への手紙』はまさに「王」です。新約聖書のいかなる書物も、その基本的な聖書教理の網羅において『ヘブル人への手紙』を凌ぐものはありません。この書簡においてパウロは、神学からキリスト論、救済論から天使論に至るまで幅広い聖書的主題に触れています。その議論を展開する過程で、彼は私たちに対し、キリスト教組織神学の全範囲にわたる基本的な聖書的真理の総復習と再教育に相当するものを与えているのです。

神の御言葉のすべての部分、すなわち「聖書は、すべて」、「教え、戒め、正しくし、義に導くのに有益」([第二テモテ 3 章 16 節](#))です。そのためだけでも、ヘブル人への手紙の研究は有意義な試みであり、教義上のトピックを幅広く網羅していることは、重要な基本的真理を思い起こさせる上で特に有用です。同時に、後述するように、ヘブル人への手紙は終末論的な問題に特に焦点を当てているため、「特に、『その日』が近づいているのを見ている」現代の信者にとって、これは時宜を得た研究です([ヘブル 10 章 25 節](#); [ローマ 13 章 11 節](#); [第一コリント 7 章 29 節](#); [ピリピ 4 章 5 節](#); [ヤコブ 5 章 9 節](#); [第一ペテロ 4 章 7 節](#); [第二ペテロ 3 章 11-14 節](#); [第一ヨハネ 2 章 18 節](#); [黙示録 1 章 3 節](#), [3 章 11 節](#), [22 章 7 節](#), [22 章 12 節](#), [22 章 20 節](#)参照)。当時のエルサレム教会の状況を扱うにあたり、『ヘブル人への手紙』は、今日のラオデキヤ教会時代の現状と数多くの重要な点で——そして不気味なほどによく似た点において——直接的な類似性をもっており、ゆえに艱難期の直前に立つ私たちにとって欠かすことのできない書となっているのです。

とはいえ、ヘブル人への手紙は少々難解で、誤解されることも少なくありません。その理由の一つは、信仰から離れ、律法とその神殿儀式に引き戻されたり、ユダヤ教グノーシス主義の環境に引き込まれたりしているユダヤ人クリスチャンに向けて書かれているからです。したがって、パウロが、こうした問題を扱う手法は、一世紀当時の異邦人クリスチャンには理解し難いものでしたし、なおさら現代のクリスチャン、とりわけ異邦人にとっては難解なものです。パウロは、自らの論証の進め方を通して、当時の律法解釈をも退けています。パリサイ派的時代に生きていたこれらのユダヤ人信者たちにとって、その律法解釈は「根源的な拠り所」であり、彼らは当時、伝統的な形であれ、あるいはグノーシス派による変形的な適用であれ、状況によってそこへ戻るよう強い圧力を受けていたのです。

書の内容をざっと見渡すだけでも(下記 IV 部参照)、パウロが強く懸念しているこれらの信徒に対して、キリストこそがすべての中心であることを彼らの思考の中に改めて確立させようとしていることが明らかになります。そのために、—それが伝統的に解釈されているにせよ、あるいはグノーシス的に歪められているにせよ—パウロはキリストの卓越性と中心性、そして律法の成就を示しているのです。まことに、『ヘブル人への手紙』の本質的な目的は、律法がより優れたもの、すなわち現実のものによって置き換えられたことを示すことにあります。古き契約に代わる新しい契約、旧き大祭司に代わる新しい大祭司、そして陰によって覆われていたものが、復活の神の子の輝かしい出現によって永遠の希望に置き換えられたことを示すことです。そして私たちもまた、その復活を心から待ち望んでいるのです。要するに、『ヘブル人への手紙』は、パウロの時代のユダヤ人信徒たちが後ろを振り返るのをやめ、イエス・キリストの栄光の光へと前を向くよう助けるために書かれたものであり、この視点こそ、今日のすべての信徒にとって大いなる益をもたらすものなのです。

## I. 誰がヘブル書を書いたのか？

この質問に対する簡潔で申し分のない答えは、「使徒パウロ」です。しかし、この答えは本稿の筆者にとっては絶対的に明確なのですが、様々な問題があるとして、誰もが常にこの評価に同意してきたわけではありません。例えば：

この手紙の著者は自分自身を名乗らないが、もともとの受取人には明らかに知られていた。約 1200 年間(紀元 400 年頃から 1600 年頃まで)、この書物は一般的に「ヘブル人へのパウロの手紙」と呼ばれていたが、初期の数世紀には、その著者について一致した見解はなかった。宗教改革以来、パウロが作者であるはずがないと広く認識されるようになった。ヘブル人への手紙の教えとパウロの手紙の教えの間に不調和はないが、具体的な強調点と文体は著しく異なっている。パウロの通常の習慣に反して、ヘブル人への手紙の著者は、彼が人間であることを示す以外([ヘブル 11 章 32 節](#))、手紙の中で自分を特定することはない。さらに、「この救は、初め主によって語られたものであって、聞いた人々からわたしたちにあかしされ」([ヘブル 2 章 3 節](#))という記述は、著者がイエスの地上での宣教の間、イエスと共にいたわけでも、パウロのように復活した主から直接特別な啓示を受けたわけでもないことを示している([ガラテヤ 1 章 11-12 節](#))。NIV スタディ・バイブル K.バーカー (1985)

上記は、ヘブル人への手紙の著者に関する現在の福音主義学者の意見をかなり正確に反映したものです—しかし、あらゆる点で間違いがあります。パウロが著者であるはずがないことを証明すると言われている上記の主張を検証してみましょう。

### 1. 強調点

「ヘブル人への手紙の教えとパウロの書簡の教えとの間に不一致はない」と後に認めているにもかかわらず、これは奇妙な反論です。たしかに『ヘブル人への手紙』は他のパウロ書簡よりもある特定の主題に多くの時間を割いています。しかし、彼の手紙はいずれも内容において互いに異なっており、それはコリント人への二通の手紙、テサロニケ人への二通の手紙、テモテへの二通の手紙という三組の書簡においてさえ同様です。その意味で「強調点」は、著者自身よりもむしろ執筆の機会と目的に大きく左右されるのです。もしユダヤ人に関する主題、すなわちモーセの律法やイスラエルの歴史に関わる主題が際立っているとするならば、それはこの手紙がエルサレムおよびその周辺の信者たちに宛てられているという事実によって十分に説明がつきます。仮に、パウロ以外の誰かが御霊に導かれてこの手紙を書いたのだと想定してみても、「強調

点」という観点から見て今私たちが持っているこのヘブル書と何がどう違っているのでしょうか、またその理由は何でしょうか。この書簡がその目的と読者のゆえに「異なっている」のは事実ですが、その「違い」それ自体は、パウロが著者であることに疑問を投げかける根拠にはなり得ません。

## 2. 文体

NIV スタディ・バイブルの編者たちも先に引用して認めている通り、この書は「パウロによるヘブル人への手紙」として「およそ 1,200 年間」一般に呼ばれてきました。彼らはさらに「最初の数世紀においては著者に関して一致した見解はなかった」と述べています。これはやや不誠実な言い方です。なぜなら、教会史の初めの四世紀について私たちが持っている情報は、一方ではごく限られており、他方ではその大部分が少数の学識ある人物たち——すなわち、こうした論争に関心を抱いた種類の人々——に由来するからです。実際、この件に関する最も古い言及はオリゲネス(紀元 3 世紀前半、エウセビオスによって引用されている)のもので、しばしば「誰がこの手紙を書いたかについては神のみぞ知る」(『教会史』6 巻 25 章)と述べたと引用しています。しかし、ギリシヤ語の実際の文は「この書簡を書いたのが誰であるかについては、神が真実をご存じである」となっており、それほど強調的でも断定的でもありません。<sup>1</sup>

著者問題に関する古代の学者たちの推測はごくわずかしかなかった残されていませんが、私たちが所持している聖書写本——完全あるいはほぼ完全な古代の聖書写本——は、『ヘブル人への手紙』をパウロ書簡集の中に含めており、それによって初代教会時代の初めからの合意があったことに疑いの余地はほとんどありません。チェスター・ビーティー・パピルス the Chester Beatty papyrus (パピルス写本 P46, 紀元 2 世紀頃)では、『ヘブル人への手紙』はパウロ書簡の中に置かれ、『ローマ人への手紙』の後に続いています。シナイ写本(紀元 2-3 世紀頃)でも、『ヘブル人への手紙』は他のパウロ書簡の中に配置され、『第二テサロニケ人への手紙』と『第一テモテへの手紙』の間にあります。バチカン写本(紀元 4 世紀頃)でも同様に『第二テサロニケ人への手紙』の後に置かれており、これは大多数の初期ギリシヤ写本の傾向でもあります<sup>2</sup>。したがって、実際の物理的証拠から見れば、初代教会がパウロ著者説について疑いを抱いていなかったことは明らかです。NIV スタディ・バイブルが報告するわずかな異論は、後世の学者たちの出所にすぎないのです。

---

<sup>1</sup> 参照: エウセビオス『教会史』3 巻 3 章 5 節, 3 巻 38 章 2-3 節。

<sup>2</sup> D. Guthrie, New Testament Introduction (Downers Grove, 1965), p.686.

ここで心に留めておくべきもう一つの重要な点は、どのような著作であれ、その書き手の文体には常に読者層が影響を及ぼすということです。パウロがテモテやテトスに宛てて書いた手紙の書きぶりは、彼が自ら牧会した諸教会に宛てた書簡に見られるものとはやや異なっています。さらにエルサレム教会は特異な存在でした。それは、単にパウロ自身が設立した教会の一つではなかったというだけでなく、私たちが知る限り、使徒としての立場で彼がこの手紙以前にそこで奉仕したことすらなかったからです。聖書の記録から判断できる範囲で、エルサレムの多くの信者たちとの以前の接触においては、そのような奉仕に対する受け入れは、よくても冷淡なものであったと言えるでしょう。

なにしろ、回心する前のパウロは、エルサレムの信者たちを迫害することに深く関与していたのです([使徒行伝 8 章 1-3 節](#), [22 章 4-5 節](#), [22 章 20 節](#), [26 章 9-11 節](#); [ガラテヤ 1 章 23 節](#))。その後、彼が彼らと交わろうとしたときも、その誠実さは疑われ、最初に彼の話を聞こうとしたのはバルナバただ一人でした([使徒行伝 9 章 26-27 節](#))。命を狙われてタルソへ帰されることになり([使徒行伝 9 章 28-29 節](#))、バルナバが彼を探した後、エルサレムではなくアンテオケに行きました([使徒行伝 11 章 25-26 節](#))。その後のパウロとエルサレム教会との関わりは、彼自身が真にそこに属していると感じることができるようなものではなく、むしろ外部の者として好意を得ようとするものでした([使徒行伝 11 章 27-28 節](#); [ガラテヤ 1 章 15-20 節](#), [2 章 1-10 節](#))。これこそが、彼が(御霊の導きに背いて: [使徒行伝 20 章 22-23 節](#); [21 章 3-4 節](#); [21 章 10-14 節](#); 次の聖句も参照:[使徒行伝 22 章 17-18 節](#); [ローマ 15 章 31 節](#))、エルサレムへ上った理由であり、彼が逮捕されるに至ったのは、異邦人信者から苦勞して集めた献金をエルサレムの教会のために献げるためでした([使徒行伝 24 章 17 節](#); [第二コリント 8 章-9 章](#); [ガラテヤ 2 章 10 節](#))。そして忘れてはならないのは、この訪問の結果、パウロは、自分でもすでに廃されたとは知っていたはずの儀式に強制的に参加させられ、そのことが発端となって逮捕され、最初のローマ投獄につながったということです。さらに第二回目のローマでの幽閉から、この手紙を書いたのです(下記Ⅱ節参照)。したがって、この手紙は、私たちが持っている他のパウロの手紙とは大きく異なっており、またパウロが他のどの手紙と比べても、手紙の相手との関係もまったく前例のないものだったのです。

パウロが他の書簡とは異なる文調を採用し、異なるアプローチを取ったのには、それ相応の理由がありました。すなわち、彼のエルサレムにおける過去の経歴と、エルサレム教会の人々の目には(彼が使徒であったにもかかわらず[[ガラテヤ 2 章 9 節](#)参照])彼に権威が欠けているように見えていたからです。これらの事情は、パウロの他の書簡に見られる使徒としての挨拶の省略(例えば、[ローマ 1 章 1 節](#), [11 章 13 節](#); [第一コリント 1 章 1 節](#), [9 章 1-2 節](#), [15 章 9 節](#); [第二コリント 1 章 1 節](#), [12 章 12 節](#); [ガラテヤ 1 章 1 節](#), [2 章 8 節](#); [エペソ 1 章 1 節](#); [コロサイ 1 章 1 節](#); [第一テモテ 1 章 1 節](#), [2 章](#)

[7 節](#); [第二テモテ 1 章 1 節](#), [1 章 11 節](#); [テトス 1 章 1 節](#))と、文体における幾分の変化を説明するのに役立ちます。しかし、見落とされているもう一つの大きな考慮点は、(少数の異邦人改宗者もいますが)この読み手の会衆のほとんどすべてがユダヤ人信者であったという事実です。実際、この手紙はユダヤ人聴衆に宛てた唯一のパウロの手紙であり、パウロより先に「信仰に入っていた」人達が、ほとんどではないにせよ、その多くを占めていたということです。

宛先がユダヤ人信者であり、主題が律法の問題と、キリストの復活後における教会時代の新しい現実(律法)と彼ら自身がどう関わるかという点にあったという事実は、この書簡の独特な形式を決定づける重要な要因でした(ユダヤ人信者だけに宛てて書かれた『ヤコブの手紙』の独自性を比較してみてください: [ヤコブ 1 章 1 節](#))。『ヘブル人への手紙』は、パウロ自身の教会ではない特定の一つの会衆に宛てられた長大な論文のような書です。しかも相手はユダヤ人信徒で、昔から律法の儀式に深く関わってきました。そのため、この書は彼ら特有の問題を扱っています。したがってこれは、パウロ自身の複数の教会に宛てて回覧される「回覧書簡」とは性格を異にしているのです。目的が違えば、文体も変わります。ヘブル書は、伝統や空想(グノーシス的な考え)ではなく、「神を信頼すること」こそが要だと示すための、徹底的な論証になっています。異邦人の教会では、偶像や哲学から真理へと転じるのは明白で全面的な転換でしたから、このような論証はあまり要りませんでした。けれどもユダヤ人信徒の場合は事情が違います。彼らは「神がかつて与えられた取り扱い-(律法による)ディスペンセーション-」から、「肉において来られ、十字架にかかり復活し、律法を成就し、いまや真理を照らすために御霊を遣わされたメシア」という、新しい啓示の真理へと移る必要があったのです。

少なくとも、エルサレムにおいてはそのように事が運ぶべきでした。ところが実際には、古い習慣が新しいものを押し流してしまうような、広く腐食的な外的影響に満ちた環境がありました。その中で問題となっていた信者たちは、伝統的なユダヤ教に戻ろうとする強力な引力に屈したり、あるいは芽生えつつあったグノーシス主義に誘惑されたりしていたのです。このような状況下では、異なる方法を採用し、異なる論証を展開し、著者自身のことについては、できるだけ表に出さずに置く必要がありました。著者は、明らかな理由と前述した理由により、あまり好意を持っていない人達に、すぐに耳を傾けてもらうために、教え自体が直接語りかけるようにする必要があったのです。

したがって、『ヘブル人への手紙』とパウロの他の書簡との間に相違があるのは驚くことではありません。むしろ、もし相違が全くなかったとすれば、その方が不思議であったでしょう。しかし一部の読者や学者が、これらの相違を非パウロ的著作である証拠と

解釈してきたのは、筆者には奇異に思われます。思想の在り方においても、またギリシヤ語で表現されている文体においても、『ヘブル人への手紙』は聖書の中の他のどの書よりもパウロの書簡に近いものです。いや、むしろギリシヤ語全般の中でも、パウロの文体にこれほど近いものは他に存在しないのです。

ここで述べた筆者の印象は主観的なものかもしれませんが。しかしそれは、ギリシヤ語に関する相応の知識、訓練、読書、そして経験に基づいています。具体例を一つ挙げるならば、パウロには独特の傾向があります。それは、主要な論点を後回しにし、従属節を用いた脱線的な表現を行うというものです。このような文を文字通りに英語へ翻訳すれば、大多数の英語読者を混乱させてしまうでしょうし、ギリシヤ語読者の中にも少なからず戸惑った者がいたに違いありません：参照：[第二ペテロ 3 章 15-16 節](#)）。

(12) そのわけは、律法なしに罪を犯した者は、また律法なしに滅び、律法のもとで罪を犯した者は、律法によってさばかれる。

(13) なぜなら、律法を聞く者が、神の前に義なるものではなく、律法を行う者が、義とされるからである。

(14) すなわち、律法を持たない異邦人が、自然のままで、律法の命じる事を行うなら、たとえ律法を持たなくても、彼らにとっては自分自身が律法なのである。

(15) 彼らは律法の要求がその心にしるされていることを現し、そのことを彼らの良心も共にあかしをして、その判断が互にあるいは訴え、あるいは弁明し合うのである。

(16) そして、これらのことは、わたしの福音によれば、神がキリスト・イエスによって人々の隠れた事がらをさばかれるその日に、明らかにされるであろう。(ローマ2章12-16節)

このような書き方は、ほとんどの英作文教師なら赤ペンで訂正するところでしょう。しかし、それはパウロの著作において決して珍しいものではありません(例：[ローマ 1 章 13 節](#)；[1 コリント 1 章 2 節](#)；[コロサイ 2 章 22 節](#)；[第二テサロニケ 1 章 10 節](#)；[第二テサロニケ 2 章 8 節](#)；さらに、[第一コリント 1 章 4 節](#)と、同 8 節の関係代名詞のつながりを参照。[第一コリント 12 章 2 節](#)では主動詞から分詞の転置法)。＜日本語訳ではこうしたことは、明白ではありません＞ また、ヘブル人への手紙にも顕著に見られます：

しかし、私たちはイエスを見えています。御使いたちよりもわずかに低くされ  
……(死の苦しさゆえに、栄光と誉れの冠をいただき)

……神の恵みによって、すべての人のために死を味わってくださったの  
です。(イクシス引用聖句から直訳 ヘブル2章9節)

これら二つの例はいずれも、英語訳では可能な限り整えられていますが、ギリシヤ語で読むと一層際立ち、生々しく感じられます。これは、筆者が他のいかなるギリシヤ語著者においても、このような形では見たことのない文体上の「癖」です。ちょうどヨハネにおいて、接続詞を用いずに文を連ねる「アシンデトン(asyndeton)」が特徴的であるように、またマルコにおいて、ギリシヤ語の接続詞 kai をヘブル語の waw と同じように用いること(七十人訳の用法に倣ったもの)や、副詞 euthys(「ただちに」)を多用する傾向(彼が42回用いるのに対し、新約聖書の残り全体ではわずか12回しか現れない)が彼の文体的特色であるように、このようなスタイル上の特異な癖は、著者を断定する「決定的証拠」ではないにせよ、十分に考慮すべき説得力ある証拠であるのです。とりわけ、それ以外の説明が、直接的かつ意図的な模倣以外に考えられない場合にはなおさらです。聖書の諸書に関しては、世俗的な学問の傾向は常に伝統的著者を否定する方向に向かってきました(たとえば、「JEPD」説に基づきモーセの五書をモーセ自身が著したのではないとする見解、イザヤ書に二人あるいは三人の著者を想定する見解、ペテロ第二をペテロ自身が書かなかったとする説、ヨハネ黙示録をヨハネの著作ではないとする説、あるいは牧会書簡をパウロの著作ではないとする説などです)。このことだけを考えても、そのような学問的懐疑主義に対しては、まず懐疑的であることこそが基本姿勢であるべきでしょう。

最後に、パウロが旧約聖書を引用する際の形式と『ヘブル人への手紙』に見られる引用との間にあるとされる相違についても、誇張されすぎています。新約聖書における引用の大部分は、パウロ書簡を含めて七十人訳(この時代にパレスチナで使用されていたギリシヤ語訳聖書で、LXXとしても知られている)から直接取られています。したがって、『ヘブル人への手紙』の引用が同じく LXX に由来しているからといって、それが非パウロ的著作の証拠になるとは到底言えません。確かにパウロは、必要がある場合には、節全体あるいは一部をヘブル語から直接訳し直すこともありました。しかし『ヘブル人への手紙』にはそれが全く見られないという主張は、事実と反します。その一例として、この書簡における最初の旧約引用、すなわち [ヘブル人への手紙 1 章 6 節\(詩篇 97 篇 7 節\)](#)からの引用)を挙げることができます。そこには七十人訳と異なる二つの点があり、一見些細に思えるかもしれませんが、実際には決して小さくはない重要性を持っているのです。

### 3. 匿名性

まず注目すべきは、パウロがこの手紙の著者であることを明言していないからといって、彼自身が著者でないということにはならないということです。当たり前のことのように思われるかもしれませんが、この点が、パウロの著者性を疑っているすべての核心なのです。上の節で示唆したように、パウロがこの手紙に自分の名前を署名しなかったのには、それなりの理由がありました。この手紙を受け取ったクリスチャンたちは、パウロの改宗者ではなく、パウロはそれまで彼らに教義的な事柄について宣教する機会がありませんでした。また、その教会の中には、パウロの話をまず聞いてみようという人もいたでしょうが、使徒としての立場からパウロが署名した手紙を頭ごなしに拒否する人も大勢いたことでしょう。結局のところ、使徒行伝を読むと、その教会には異邦人の改宗に懐疑的で、伝統的なユダヤ教に改宗しない異邦人を嫌う人々が大勢いたことがわかります([使徒行伝 10 章 45 節](#), [11 章 2-3 節](#), [15 章 5 節](#), [21 章 21-25 節](#))。「パウロからの手紙」というのは、そのほとんどではないにしても、多くの人々にとっては赤信号であったでしょうし、同胞を説得しようとしている真理よりも、今や有名になったこの囚人と、律法よりも恵みを好んだという彼の記録(改宗前の暴力的な行動は言うまでもない)を問題にしたらどうと予想されます。

(20) 一同はこれを聞いて神をほめたたえ、そして彼に言った、「兄弟よ、ご承知のように、ユダヤ人の中で信者になった者が、数万にものぼっているが、みんな律法に熱心な人たちである。(21) ところが、彼らが伝え聞いているところによれば、あなたは異邦人の中にいるユダヤ人一同に対して、子供に割礼を施すな、またユダヤの慣例にしたがうなと言って、モーセにそむくことを教えている、ということである。(22) どうしたらよいか。あなたがここにきていることは、彼らもきっと聞き込むに違いない。(23) ついては、今わたしたちが言うとおりのことをしなさい。わたしたちの中に、誓願を立てている者が四人いる。(24) この人たちを連れて行って、彼らと共にきよめを行い、また彼らの頭をそる費用を引き受けてやりなさい。そうすれば、あなたについて、うわさされていることは、根も葉もないことで、あなたは律法を守って、正しい生活をしていることが、みんなにわかるであろう。(25) 異邦人で信者になった人たちには、すでに手紙で、偶像に供えたものと、血と、絞め殺したものと、不品行とを、慎むようにとの決議が、わたしたちから知らせてある」。[\(使徒行伝21章20-25節\)](#)

さらに、パウロはローマの獄中からエルサレム教会に手紙を書いており、パウロの告発者たち、つまりパウロに対する群衆を扇動し、後にパウロを暗殺しようとした不信心

者たちは、まだエルサレムにいました。パウロを迫害していた者たちは、パウロと関係のある者なら誰でも、それが「パウロ」の名を冠したものであれば、その手紙の元の持ち主であろうと、その手紙の写しを持っているのを発見された者であろうと、喜んで迫害したことでしょう。

では、もしパウロ以外の誰かが、受け取り手に十分よく知られていて、ある程度耳を傾けてもらえる立場にあったのなら、どうして自分の名前を**明かさ**ない理由があったのでしょうか。むしろ、これはパウロ以外の著者である証拠になるどころか、かえって彼こそが著者である可能性を一層強めるものです。というのも、私たちが知る限り、このようなやり方を取らざるを得ない個人的な「事情(負い目)」を抱えていながらも、その教会の真の信者たちにはなお受け入れられ、手紙が保存される可能性を持っていたのは、パウロただ一人だったからです。

ですから、パウロがこの手紙に自分の名を記さなかったのには、十分な理由があったのです。彼自身が他の書簡で「他人の土台の上に建てることを避けている」([ローマ 15 章 20 節](#); [ガラテヤ 2 章 9 節](#)参照)と語っていることから分かります。間違いなく、この手紙を書く決断は容易なものではありませんでした。彼が愛し、そのために投獄の苦しみに耐えていたこの人々、この教会の益のために、御霊に導かれてなされた決断でした。しかし同時に、それは重圧の中で下された決断でもありました——すなわち、この教会が恵みから離れ、再び行いの古き道へと後退しつつあるという憂慮すべき知らせを耳にしていたからです。その後退は、伝統の力や迫害の恐れに引きずられたものであると同時に、異邦人諸教会を牧会する中でパウロが過去に戦わねばならなかった、芽生えつつあるグノーシス主義の影響も受けていたのです。

#### 4. ヘブル 2 章 3 節の反論

さらに、「この救いは、初めに主によって語られ、それを聞いた人たちが確かなものとして私たちに示したものです。」([ヘブル 2 章 3 節](#) 新改訳IV)という記述は、著者<ヘブル人への手紙の著者>が地上での宣教の間イエスと共にいたわけでも、パウロのように復活した主から直接特別な啓示を受けたわけでもないことを示している。

[ヘブル人への手紙 2 章 3 節](#)が、他の人々が以前に「主を通して直接に」特別な啓示を受けたと述べている事実は、ヘブル書の著者がその後に同じように啓示を受けなかった、ということを論理的に意味するものではありません。ヘブル書は教会によって正

しく聖書正典の一部と認められており、著者が誰であるかに関わらず、聖霊によって靈感を受けた書です。さらに、この手紙はイエス・キリストについての特別な啓示に満ちています。この書簡が示す教理的真理に対する深い熟達ぶりを考えるなら、著者がイエスの地上での宣教に直接立ち会わなかったことは、むしろパウロであることをほぼ保証するものです。もし他の使徒たちを候補から外すならば、これほどの知的・霊的資質を備えて、このような手紙を書くことのできる人物が、パウロ以外に誰がいるでしょうか。

しかし、NIV 訳 SB の[ヘブル人への手紙 2 章 3 節](#)の解釈は、パウロが著者であることを否定しようとする解釈全ての典型のようなものです。欽定訳聖書はこの箇所を次のように解釈しています：

(2)天使たちによって語られたことばが堅固であり、すべての違反と不従順とが、正当な報いを受けたとすれば、(3)わたしたちが、これほど偉大な救いをないがしろにして、どうして逃れられよう。この救いは、初めに主によって語られ始め、主の言葉を聞いた者たちによって私たちに確かなものとされた；(4)神はまた、御心に従って、しるしと不思議と、さまざまな奇跡と、聖霊の賜物とをもって、それらを証しされた。(KJV 訳 ヘブル 2 章 2-4 節)

ギリシャ語本文を読む人ならすぐに気づくべきことは、欽定訳 (KJV) や他の多くの翻訳 (最初に引用した NIV スタディ・バイブルが参照している NIV を含む) が、3 節に出てくる二つ目の前置詞句「彼を聞いた人々によって (by them that heard him)」を、誤って扱っているという点です。この句は「私たちに確かなものとされた (confirmed unto us)」の後には出てこず、その**前**に置かれています。さらに、文法的に見ても、この句を後に続く部分にかけるのではなく、その**前**にある部分にかけるべきであることを示す十分な理由が存在します。

(3 節後半)……この救いは、[主を通して先に]御声を聞いた人々(すなわち使徒たちとその仲間たち、紀元 30 年代半ばから後半の初代教会の世代)によって最初に告げ知らされ、その後、今の私たち(紀元 50 年代半ばから後半の現世代の教会)にとっても確かなものとされ、(4 節)神ご自身が、しるしと不思議とさまざまな力ある御業、さらに御心に従って分け与えられる聖霊の賜物によって、この救いに証を立てられたのである。(NKJV 訳 ヘブル 2 章 3-4 節)

このように理解すると、「主の御声を聞いた人々」とは十一人の使徒とその仲間たちを指しています。彼らは「主によって」——すなわち、主が地上におられた間に直接語

られたというよりも、昇天後ペンテコステにおいて主から聖霊を受けて力を与えられたことによって——救いのメッセージを広めていったのです([使徒行伝 1 章 8 節](#); [マタイ 28 章 19 節](#)参照)。

多くの翻訳では語順が誤っているため、奇跡の働きが「主を直接聞いた人々」に起こったもののように見えてしまいます。しかし本来は、「わたしたちに確かなものとした」として理解すべきなのです。つまり、この救いの御言葉が、当時の世代の信者たちに、パウロ自身の宣教活動を通してどのように確かめられたのかを説明しているのです。その確かさは、聖霊がパウロの手を通して数々の奇跡を行うことで示されました。したがって、この奇跡を「わたしたちに確かなものとした」として語る表現は、実はパウロが著者であることを裏付けるものです。なぜなら、これは彼自身に与えられた使徒としてのしるしを意図的に指し示しているからです([第二コリント 12 章 12 節](#); [ローマ 15 章 18-19 節](#)参照)。

## 5. パウロ自筆の肯定的な証拠

ヘブル書をパウロが記したことを示す前向きな根拠も数多く存在します。たとえば、ローマ書を考えてみてください。これはヘブル書とほぼ同じ分量をもち、また非常に重要な点で多くの類似性を備えています。どちらの書簡も、その教会の創設者ではなかったものの、権威ある人物によって書かれました。そのため、両者は共に最後に謝罪で結ばれているのです(ローマ書では大胆さについて[[ローマ 15 章 15 節](#)]、ヘブル書では簡潔さについて[[ヘブル 13 章 22 節](#)])。また、両書簡ともテモテを協力者として挙げています(ローマ書では冒頭に[[ローマ 16 章 21 節](#)]、ヘブル書では特異な形で[[ヘブル 13 章 23 節](#)])。両書簡は長く、脱線も多いのですが、しかし一つの特定の主題に集中しており、それが両者を結びつけています。すなわち、両書ともユダヤ人に関する問題を扱っており、ローマ書では教会におけるユダヤ人と異邦人の関係の正しい性質を、ヘブル書では十字架以後におけるユダヤ人と律法との関係の正しい性質を扱っています。古代ギリシ文や学全体を見渡しても、ローマ書とヘブル書ほど互いに共通点を持つ書簡・論文・書簡文は他に存在しません。

ヘブル書に含まれる深い教理的洞察や、全体を通して示されている教理に対する卓越した理解が、イエス・キリストの使徒以外の誰かから出たとは考えにくく、また聖霊がこのような重要な務めを他の誰かに委ねられたとも考えにくいのです。さらに多くの点において、ヘブル書は書簡の中でも最も偉大なものといえます。なぜなら、それは教会時代の移行期において律法との決別を成し遂げるための基礎を据えているから

であり、この点を新約聖書の中で教理的な説明をもって示しているのは、実際のところパウロだけからです。そしてヘブル書はまた、恵みがイエス・キリストというお方において律法に取って代わった理由を、最も見事に示しているのです(この点でも、他の書簡同様にパウロ的領域であります)。

他にもパウロによる著作を示す前向きな根拠はいくつかあります。そのいくつかは本書の一節一節の研究の際に改めて触れることにしましょう(たとえば、「わかりにくい箇所」とペテロが述べた特徴が[[第二ペテロ 3 章 16 節](#)]、まさにパウロに特有の形で表れている点です)。また、「イタリアにいる人々」への言及や、テモテの釈放への言及(これは著者自身には同じことが当てはまらない、つまり著者自身は釈放されていないことを強く示唆しています。なお、ヘブル 13 章 23 節には「もし間もなく行けるなら」と実際に書かれています)は、確かにパウロの二度目のローマ幽閉の状況とうまく符合しています。

その他にも積極的な示唆がありますが、そのいくつかは本書の一節一節の研究の中で適切な場所に譲ることにします(すなわち、ペテロが「理解しがたいもの」と特徴づけた数々のパウロ的な言い回しが、まさにパウロに特有の形で表れている点です[[第二ペテロ 3 章 16 節](#)])。さらに、「イタリアにいる人々」への言及や、テモテが釈放されたことへの言及(これは著者自身についてはそうではない、つまり著者自身は釈放されていないことを強く示しています)は、パウロが第二回目のローマでの投獄中にこの手紙を書いたと考えると非常に符合します；ちなみに、[ヘブル 13 章 23 節](#)には実際に「早く来れば」とある)は、確かにパウロの第二次ローマ捕囚とよく一致しています。また、[ヘブル人への手紙 10 章 34 節](#)にある、著者がかつて、手紙の受け取り手の何人かを投獄したことへの言及(すなわち、『私の鎖』とは、著者が彼らに負わせたものを指す)は、著者がパウロであることを示すものでしかありません。

最後に、パウロ以外にふさわしい候補が存在しないという事実も、決して取るに足らない証拠ではありません。長い歴史の中で、パウロ以外の人物を著者とするさまざまな説が提案されてきましたが、いずれも合意を得るには至りませんでした。それにはもっともな理由があります。たとえ何らかの理由でパウロによる執筆に疑問を抱く人であっても、公平な評価を下すなら、この書簡を著したのは他の誰でもなくパウロである可能性が最も高いという結論に達するはずです。

## II. ヘブル人への手紙の年代と時期

使徒パウロの生涯を、彼の旅の具体的な年代や彼の書簡の年代という観点から再構築することは、聖典を何気なく読むよりもはるかに複雑な作業です。その結果、パウロに関連する多くの重要な問題に関して、全体的な学者の一致した見解は得られていません(実際、ほとんどの学者はパウロがヘブル人への手紙の著者であるという事実さえ認めていません)。まず始めに、ヘブル人への手紙はパウロの最後の書簡であり、第二テモテとともに、ローマでの第二捕囚の終わり頃、紀元 59、60 年頃に書かれたものです。

使徒行伝は、パウロの最も忠誠で忠実な同行者の一人であったルカによって書かれ、[使徒行伝28章30節](#)に、エルサレムでの逮捕、カイザルへの上訴、ローマへの波乱に満ちた航海の後、「パウロは、自分の借りた家に満二年のあいだ住んで、たずねて来る人々をみな迎え入れ、」と記されています。これが彼の最初のローマ捕囚であり、ルカの記述から、比較的快適なものであったことがわかります。それよりも短い二度目の捕囚の際に、イエス・キリストのために殉教することになりました。

この福音のために、わたしは悪者のように苦しめられ、ついに鎖につながれるに至った。しかし、神の言はつながれてはいない。(第二テモテ2章9節)

あなたが来るときに、トロアスのカルポの所に残しておいた上着を持ってきてほしい。また書物も、特に、羊皮紙のを持ってきてもらいたい。(第二テモテ4章13節)

(16)わたしの第一回の弁明の際には、わたしに味方をする者はひとりもなく、みなわたしを捨てて行った。どうか、彼らが、そのために責められることがないように。(17)しかし、わたしが御言を余すところなく宣べ伝えて、すべての異邦人に聞かせるように、主はわたしを助け、力づけて下さった。そして、わたしは、ししの口から救い出されたのである。(第二テモテ4章16,17節)

上記の箇所やテモテへの手紙第二の他の箇所を見ると、パウロは当時、獄中にあり、前の事件のように不特定の罪状ではなく、「悪人として」起訴されました([第二テモテ](#)

[2 章 9 節](#))<sup>3</sup>。パウロは、比較的快適に暮らしていたどころか、最も基本的なものにさえ欠いていて([第二テモテ 4 章 13 節](#))、非常に危険な法的状況に置かれていました。ローマ帝国による捕囚は一度だけでなく、二度あったと考えるには、他にも多くの説得力のある理由があります<sup>4</sup>；例えば、[テモテへの第二の手紙 4 章 20 節](#)で、パウロは(エルサレムで一緒だった：[使徒行伝 21 章 29 節](#))トロピモを「ミレトに病気で残してきた」と述べていますが、カイザリアからローマへの航海と最初の捕囚では、ミレトどころか、小アジアにも寄港していません。

パウロの宣教の最後の数年間を簡単に描くと、次のようになります。紀元 52/53 年頃、エルサレムでの暴動の後、カイザリヤで投獄された後、ユダヤ総督アントニウス・ペリクスは、パウロをその任期が終わるまで(私利私欲のため：[使徒行伝 24 章 27 節](#))ずっと捕囚状態に置きました。彼の後任であるポルシウス・フェストは、ネロ皇帝が紀元 54 年に権力の座に就いた直後、彼の後任として派遣されましたが、同様にパウロの市民権には無頓着で、裁判のためにエルサレムに移送し、その後おそらく暗殺されるのを避けるために、使徒をカイザルに上訴させました([使徒行伝 25 章 11 節](#))。その結果、紀元 54/55 年頃、パウロは船でローマに送られ、使徒行伝 27 章に記されているようなひどい嵐に見舞われましたが、最終的にはローマに到着し、裁判中の二年間は寛大な待遇が許されました([使徒行伝 28 章 16 節](#)；[28 章 30 節](#))。

上述したような理由から、ルカが言及したこの二年間の期間の後、パウロは釈放されたと結論するのが妥当です。ルカが使徒行伝をここで終えているのは、彼が(ルカの福音書とともに)この本を書いたのが、この時ローマにいたパウロと一緒にいたからであり、したがって当然、パウロの宣教の将来の成り行きをまだ知らなかったからです。パウロが最初の捕囚から解放された紀元 57 年初頭から、二度目の捕囚とローマでの裁判、すなわち紀元 59 年末から 60 年にかけてのパウロの死までの間に、パウロは次のような旅をしました：

1) コリントへ([第二テモテ 4 章 20 節](#)参照)：

エラストはコリントにとどまっており、トロピモは病気なので、ミレトに残してきた。([第二テモテ 4 章 20 節](#))

釈放後、パウロはローマから陸路で南イタリアに向かい、コリントに向かったと思われます。南イタリア(レギウム)からエピルス(ニコポリ)へ、あるいは半島のコリント湾側に

---

<sup>3</sup> ギリシャ語の kakourgos は、語源的には「悪事を働く者」を意味するが、英語では「felon(重罪犯)」に相当する専門的な意味合いを持つ。

<sup>4</sup> この問題の詳細については、F.J. Goodwin, A Harmony of the Life of St. Paul (1895) 189-196, 215-220; P. Schaff, History of the Christian Church (1910) v.1, 328-333; H.C. Thiessen, Introduction to New Testament (1943) 268 を参照。

あるコリント領に直接行くには、比較的短時間で、かつ安全な航海であったからです<sup>5</sup>。ローマでパウロと一緒にいたテモテは([ヒリピ 1 章 1 節](#); [コロサイ 1 章 1 節](#); [ピレモン 1 章 1 節](#))、パウロと一緒にコリントに向かったか、あるいは先に遣わされて、その時すでにコリントにいたのです(その教会との以前との関係を参照: [第一コリント 4 章 17 節](#), [16 章 10 節](#); [第二コリント 1 章 1 節](#), [1 章 19 節](#))。そこから、パウロはテモテをエペソに送り、その教会を担当させ、テモテ第一の手紙に記されている問題に取り組ませました([第一テモテ 1 章 3 節](#))<sup>6</sup>。

## 2) マケドニヤへ:

わたしがマケドニヤに向かって出発する際、頼んでおいたように、あなたはエペソにとどまっていて、ある人々に、違った教を説くことをせず、([第一テモテ 1 章 3 節](#))

パウロがテモテへの手紙第一を書いた時、マケドニヤ、クレタ、ミレトのどこにいたかは定かではありません。パウロはこの最後の旅のある時点で、手紙を書く余暇があり、信頼できる仲間、おそらくテキコの手によってその手紙を送る機会がありました([エペソ 6 章 21 節](#); [テトス 3 章 12 節](#); [第二テモテ 4 章 12 節](#)参照)。しかし、パウロの仲間や彼らの旅や働きについては、聖書が垣間見せてくれるだけで、私たちが知ることのできないことがたくさんあります([テトス 3 章 13 節](#); [第二テモテ 4 章 10 節](#)参照)。

## 3) クレタ島へ

あなたをクレテにおいてきたのは、わたしがあなたに命じておいたように、そこにし残してあることを整理してもらい、また、町々に長老を立ててもらうためにほかならない。([テトス 1 章 5 節](#))

---

<sup>5</sup> ペロポネソスの南端にある危険なマレア岬を避けるため、多くの東西海運はコリント地峡を越えて貨物を移し、そのために作られたディオルコス(コリント湾からサロニコス湾まで延びる舗装道路)を使って船ごとコリント地峡を渡ることさえあった。

<sup>6</sup> 「わたしがマケドニヤへ行ったときにあなたに勧めたように——エペソにとどまっていなさい」([第一テモテ 1 章 3 節](#))という言葉の意味は、「エペソへ行って、そこに滞在しなさい」ということです。パウロがこの命令を与えたとき、彼はエペソではなくコリントにおり、その後、パウロとテモテはそれぞれ別々の道を進みました。パウロは以前から、再びエペソに戻ることはないとはっきり述べていました([使徒行伝 20 章 15 節](#), [20 章 25 節](#), [20 章 38 節](#))。その理由の少なからぬ部分は、彼の働きに敵対するユダヤ人々からの反対、そして彼自身への個人的な敵意のゆえに、そこで逮捕される危険があったからです([使徒行伝 24 章 18-19 節](#); 参照 [第一テモテ 1 章 20 節](#); [第二テモテ 2 章 17 節](#); [4 章 14 節](#))。もしパウロが結局はエペソに戻ったのだとルカが知っていたなら、彼が[使徒行伝 20 章 15 節](#), [20 章 25 節](#), [20 章 38 節](#)を記すことは、おそくなかったでしょう。

マケドニアに行き、そこ(ピリピとテサロニケ)の兄弟たちを励ました後、パウロはテトスと共にクレタ島に向かいました。テトスへの手紙は、パウロが小アジア、おそらくミレトに戻ったときに書かれました。私たちはこの手紙からしかこの伝道旅行について知りませんが、「他の人の土台の上に建てる」([ローマ 15 章 20 節](#))のではなく、福音のために新しい地域を開拓したいというパウロの願いと一致していることは確かです。

#### 4) ミレトへ

エラストはコリントにとどまっており、トロピモは病氣なので、ミレトに残してきた。([第二テモテ 4 章 20 節](#))

ミレトは小アジアのエーゲ海沿岸の中心に位置し、マイアンデル川が海に注ぐ湾の真向かいにありました。そのため、海岸を上ったり下ったりする短い航海やエーゲ海の島々への航海の出発点として、またマイアンダー渓谷の内陸の町(ラオデキヤやコロサイなど)との商業の拠点として、適した場所でした。前の脚注で述べたように、パウロは個人的にエペソに戻らない理由があり、ミレトは地理的な利点と、クリスチャン・コミュニティが発展しているという理由から、適切な代替地となりました([使徒行伝 20 章 17 節](#); [ピレモン 1 章 2 節](#), [1 章 22 節](#); [コロサイ 4 章 17 節](#)参照)。

#### 5) ニコポリへ

わたしがアルテマスかテキコかをあなたのところに送ったなら、急いでニコポリにいるわたしの所にきなさい。わたしは、そこで冬を過ごすことにした。([テトス 3 章 12 節](#))

エーゲ海での伝道活動を強化し、拡大したパウロは、翌年の春に再び航海に適した気候になったら、次は(最初の逮捕と投獄の前にパウロが意図していたように: [ローマ 15 章 24 節](#), [15 章 28 節](#))スペインに渡航するつもりだったのでしょうか。この名前の町はいくつもありましたが、上記のニコポリはエピルス、つまりアドリア海沿岸のギリシヤ北西部、コルフ島の近くにある町である可能性が高いです。エピルスの町は、東方から地中海西部に向かう旅の拠点として最適であり、また、ペロポネソス南岸の危険や、コリント地峡での時間のかかる航海を避けることができたからです。

6) しかし、パウロはニコポリスまで行くことはありませんでした。ミレト(上の文章が書かれた都市)を出発したパウロは、北の海岸にあるトロアスで逮捕されました。エペソの反パウロ派が、長年にわたってパウロに多大な損害を与えた結果であったことは間違い

ありません([使徒行伝 21 章 27 節](#), [24 章 18-19 節](#); [第二テモテ 4 章 14 節](#); [使徒行伝 19 章 26-27 節](#), [19 章 33 節](#); [20 章 3 節](#); [第一テモテ 1 章 20 節](#)参照)。

あなたが来るときに、トロアスのカルポの所に残しておいた上着を持ってきてほしい。また書物も、特に、羊皮紙のを持ってきてもらいたい。(第[二テモテ 4 章 13 節](#))

上記は、パウロがローマの獄舎から(58/59 年の冬が近づいていた)、パウロの事前の命令([第一テモテ 1 章 3 節](#))に従ってまだエペソで宣教していたテモテに宛てて書いたものです。以上のことから、パウロは、テモテが自分がたどったのと同じ道をたどって、すぐにローマの自分のところに来ることを期待していたと想像つきます。つまりすなわち、小アジア沿岸を北上し、(ダーダネル海峡以南のギリシヤへの一般的な通過点である;[使徒行伝 16 章 8-11 節](#), [20 章 1-6 節](#))トロアスへ行き、そこからマケドニアへ、マケドニアからテモテは、たとえ冬が近かったとしても、あるいはすでに冬になっていたとしても、イグナティア街道を通してアドリア海沿岸のイタリアに行き、そこから日帰りでイタリアの「かかと」にあるブルンディシウムに行くことができたはずです(天候がよければ、冬でも可能であったはずです)。

7) テモテが到着した後、パウロは『ヘブル人への手紙』を書きました。これは彼が深く愛していた教会と人々のための最後の奉獻でした(もっとも、その愛が同じ熱意をもって報われることは、少なくとも大多数においてはありませんでした)。[テモテへの手紙 第二 4 章 16-17 節](#)からわかるように、パウロがその手紙を書く以前に、すでに予備審理が行われており、おそらく彼がローマに到着して間もない頃だったと思われます。この予備審理と、彼が死刑を宣告された最終裁判との間にはかなりの時間があり、その間にテモテがパウロからの訴えを受けてローマに到着することができ、さらにパウロが『ヘブル人への手紙』を執筆し、エルサレムにいる彼の友人たちの一行も間に合って彼のもとに来ることを期待できるだけの余裕がありました(このような遅延は珍しいことではなく、この場合は小アジアからの告発者たちが到着する時間を与えるために延長されたのでしょう)。[ヘブル人への手紙 13 章 23 節](#)の正しい読みは「もしあなたがたが速やかに来るなら」となっており、支持者たちに急いで来るように励ましています。名前が明示されていないのは、彼らが同じような迫害や訴追にさらされるのを避けるためでした(テモテ自身もローマ到着後に逮捕されたいのです)。パウロには、正式な裁判が無期限に引き延ばされることはまずないだろうという確信がありました。テモテがローマに到着すれば、彼は信者や皇帝の官僚組織に何らかのつながりを持つ協力者たちの助けを借りつつ、パウロが拘束されている場所へ仲間たちを導く役割を担うことになっていたのです([ピリピ 1 章 13 節](#); [4 章 22 節](#); [第二テモテ 1 章 16-17 節](#)参照)。

わたしたちの兄弟テモテがゆるされたことを、お知らせする。もし彼が早く来れば、彼と一緒にわたしはあなたがたに会えるだろう。(ヘブル13章23節)

8) 有罪判決を受けた後、パウロは処刑されました。伝統によれば、パウロは斬首され、十字架刑ではなくローマ市民に与えられた刑罰を受けたとされています。

ローマでは、ペテロはドミニカと同じような苦しみを受け、パウロは斬首された。

ローマでは、ペテロは師匠のような死に見舞われ、パウロは洗礼者[ヨハネ]のような最期を戴いた(すなわち、十字架刑と斬首刑)。

—テルトゥリアヌス(Tertullian De Praescript. 36)

こうしてパウロの殉教は、紀元 70 年にローマ軍がユダヤ人の反乱を鎮圧する最終段階において、エルサレムと神殿、そしてその町のすべてが破壊されるほぼ十年前に起こりました(反乱は数年前、紀元 68 年に始まっていました)。「うまく立ち回る」ために再び律法の儀式に関わるという悪しき妥協をしてしまったエルサレムの信者たちにとって、それはメシヤがまだ来ていないと宣言する儀式であり(その結果、十字架を汚すものとなりました[ヘブル 6 章 4-12 節, 10 章 26-39 節])、その妥協から良い結果が生まれることはまったくありませんでした。そして、パウロの手紙を受け取ってもなお悔い改めて立ち返ることを拒んだすべての人々にとっては、その滅びの中に巻き込まれたことが神の懲らしめであると理解するのが正しいのです。

(26)もしわたしたちが、[福音の]真理の知識を受けたのちにもなお、ことさらに罪を犯しつづけるなら、罪のためのいけにえは、もはやあり得ない。(27)ただ、さばきと、[御心に]逆らう者たちを焼きつくす激しい火とを、恐れつつ待つことだけがある。(28)モーセの律法を無視する者が、あわれみを受けることなしに、二、三の人の証言に基いて死刑に処せられるとすれば、(29)神の子を踏みつけ、自分がきよめられた契約の血(あなたがたが聖別された血そのもの)を汚れたものとし、さらに恵みの御霊を侮る者は、どんなにか重い刑罰に価することであろう。(ヘブル10章26-29節)

### III. ヘブル人への手紙の背景

誰がヘブル書をエルサレムに持ち込んだのか、定かではありません([テトス 3 章 12 節](#))。おそらくテキコ Tychicus でしょう([第二テモテ 4 章 12 節](#)も参照してください。あるいは、名前の知られていない忠実な信者であったかもしれません)、またパウロがエルサレムにいる誰に最初に託すように命じたのかもわかりません。しかし、手紙を届けた者が誰であれ([ローマ 16 章 1-2 節](#)参照)、その使徒<パウロ>が親しくしていた人に最初に渡すように指示されていた可能性は高いでしょう。例えば、バルナバやシラス(パウロがバルナバやマルコと和解したことについて: [第一コリント 9 章 6 節](#); [コロサイ 4 章 10 節](#); [第二テモテ 4 章 11 節](#); [ピレモン 1 章 24 節](#)参照)、あるいは、パウロの働きや当時の彼のしようとしていたことに最も共感し、当時の他の無名の人々をパウロは意味していたかもしれません。次に、これらの友人たちは、書簡を書き写した後、エルサレム教会の長老たち、中でもヤコブとユダ、またその当時いた場所によってはペテロとヨハネにも手紙を渡したと考えるのが自然です。

この書簡がエルサレム以外のパレスチナのユダヤ人信者にどのような良い影響を与えることになったにせよ、パウロの死と、彼の不在によって、新しく開かれた異邦人教会での使徒的監視の空白によってもたらされた弾みとともに、この書簡は他の使徒たちを行動に駆り立てることになったと言えます。このことは、いわゆる「一般書簡」、すなわち、ヘブル書に続いて比較的早く、最初にユダとヤコブの書簡が、その後ペテロとヨハネの書簡が執筆され、全聖典が紀元 70 年のエルサレム陥落前に完成されたことによって証明されています。

ヘブル人への手紙は、パウロ自身の多くの信徒を対象とした「回勅(訓戒の手紙)」というよりは、パウロ自身の会衆ではない特定の信徒たちに宛てた長い論文です。そのため、この手紙の口調もパウロの他の書簡とは異なっており、他のどの手紙よりもローマ人への手紙(これもパウロ自身の教会ではない)に似ています。また、ヘブル人への手紙の目的も異なっています。ヘブル人への手紙の目的は、伝統的なユダヤ教に戻ろうとする(あるいはグノーシス主義の幻想に誘惑される)信徒たちの強力な引力に屈してしまうような、外部からの腐食的な影響が蔓延している状況における、神への信頼 vs 伝統の問題についての詳細な弁明です。したがって、これまで見てきたように、その文体に他の書簡との違いがあるのは驚くべきことではありません。かえって、違いがなかったら、おかしいのです。

当時、牢獄で不自由な生活を余儀なくされ、残された時間がほとんどないという重圧の中で、この偉大な手紙を書くために必要とされた労力を過小評価すべきではありません。実際、この作品は聖霊の靈感を受けています。そして、聖霊はさまざまな方法でパウロを助けられました。しかし、それでも、この作品を練り上げ、書き上げなければならなかったのはパウロで、彼はそれを素早くしなければなりません。神の言葉全体は、私たちが所有する素晴らしい祝福であり、パウロのすべての書簡は、そこに聖書の教理が凝縮されているという点で、特に貴重です。しかし、多くの点で、ヘブル人への手紙はパウロの最大の功績であり、それが書かれた困難な状況や時間的な圧力を考慮すれば、なおさらです。

この手紙を書くには、精神的な負担も大きいものでした。パウロは、自分の命よりも同胞を愛し、信じない人々の救いをもたらすためなら、喜んでその命を投げ出そうとしました([ローマ 9 章 1-5 節](#); [使徒行伝 21 章 13 節](#)と[ローマ 11 章 13-14 節](#)も参照)。そしてその時、イエス・キリストに立ち返ったパレスチナの人々でさえ、霊的な危険にさらされていました。パウロは、個人的な訪問によってその状況に変化をもたらすことはで

きませんでした。それは不可能であっただけでなく、そのような介入を試みた彼の最後の試みは、あらゆる点で失敗に終わっていました(それが、彼が釈放されても戻って行くことを控えていた理由の一端を説明していることは間違いありません)<sup>7</sup>。最初の逮捕とこの二度目の投獄の後、パウロはエルサレム教会の全員からペルソナ・ノン・グラータ(好ましくない人物)とみられていたわけではなくとも、彼の評判は、不当にも、揺らいでいたと言ってよいでしょう。パウロはそのこと自体は気にしていなかったでしょうが、道を踏み外した信者たちのことを気にかけ、彼らに話を聞いてもらうことに気を回していました。パウロのジレンマは、彼らの霊的な危機に目を覚まさせるため、伝達人が誰であるかという理由で彼の話す真理の言葉を拒否させることなく、彼らに理解してもらう方法を見つけることにありました。その解決策がヘブル人への手紙でした。ヘブル人への手紙は、謙遜さと毅然とした態度のバランス、間違いについての慎重な暴露、しかし誰も反論できないような広範な真理の文脈の中で、ちょうどよい語調で話しています。ヘブル人への手紙は、霊的な難破に瀕していたクリスチャンにとって完璧な「救命具」であり、エルサレム教会や私たちに対するのと同様に、パウロに対しても神の御霊からの贈り物でもありました。しかし、これを書き上げることは、パウロの波乱に満ちた生涯の中で、最も心労する、困難な経験の一つであつたに違いありません。その数年

---

<sup>7</sup> [ガラテヤ 2:2](#) でパウロは、以前エルサレムに行ったのは神の命令(カト'アポカリプシム)によるものであったと述べているが、最後の運命的なエルサレム行きを促したのはそのような命令ではなく、実際、彼は聖霊によって何度も行くなどと言われていました([使徒行伝 20 章 22-23 節](#); [使徒行伝 21 章 3-4 節](#), [21 章 10-14 節](#); [使徒行伝 22 章 17-18 節](#)と[ローマ 15 章 31 節](#)も参照)。このような不吉な警告にもかかわらず、パウロが耐え忍んだのは、ユダヤ人に対するパウロの愛の表れです。

前に口説かれて、その妥協が裏目に出てパウロは何度も死に至るほどになったことで、同胞の多くのユダヤ人が彼を見下すようになっていた中、彼らを訓戒するためには、聖霊による特別な大胆さが必要でした。

(20) 一同はこれを聞いて神をほめたたえ、そして彼に言った、「兄弟よ、ご承知のように、ユダヤ人の中で信者になった者が、数万にものぼっているが、みんな律法に熱心な人たちである。(21)ところが、彼らが伝え聞いているところによれば、あなたは異邦人の中にいるユダヤ人一同に対して、子供に割礼を施すな、またユダヤの慣例にしたがうなと言って、モーセにそむくことを教えている、ということである(22)どうしたらよいか。あなたがここにきていることは、彼らもきっと聞き込むに違いない。(23) については、今わたしたちが言うとおりのことをしなさい。わたしたちの中に、誓願を立てている者が四人いる。(24) この人たちを連れて行って、彼らと共にきよめを行い、また彼らの頭をそる費用を引き受けてやりなさい。そうすれば、あなたについて、うわさされていることは、根も葉もないことで、あなたは律法を守って、正しい生活をしていることが、みんなにわかるであろう。(使徒行伝21章20-24節)

パウロのヘブル人への手紙を効果的なものにするためには、パウロの手紙を受け取った人たちの好意をすぐに失わないように、また聞き手を獲得するために、目の前の問題に正確に正しい順序で取り組まなければなりません。パウロは、彼らの伝統や律法への愛以上にキリストへの信仰の絶対的優越性を思い起こさせながら、彼らの危険な行動を叱責しなければなりません。そしてパウロはこの手紙を通して、聖書の基本的な真理([ヘブル 5 章 12-14 節](#)と[ヘブル 6 章 1 節](#)を参照)を思い起こさせ、再教育しなければなりません。この真理なくしては、悔い改めの無さという、彼らが陥ってしまった深みと、重大な霊的危険を理解することはできないのです。同時に、この欠陥のある人物(キリストに立ち返る前にその教会を迫害したことが少なからず彼らの目に映っている)の人格がつかずきとなって、先入観のためパウロの手紙を拒絶してしまうようなことがないようにしなければなりません。これは一通の手紙の中で成し遂げなければならない大仕事であり、パウロが私たちにとっては非常に長い文章を書き終えた後でも、それが「手短かに書いた」([ヘブル 13 章 22 節](#))と感ずることができるのは、間違いなくそのためです。時間が許せば、パウロはもっと多くのことを書いたに違いない。従って私たちが持っているのは、パウロが迅速な救出作戦に全力を尽くしたものであり、彼がこよなく愛した人々と教会を救うための最後の大胆な試みだったのです。

兄弟たちよ。どうかわたしの勧めの言葉を受けいれてほしい。わたしは、ただ手みじかに書いたのだから。(ヘブル 13章22節)

それゆえ、ヘブル人への手紙では、パウロが以前、感傷と感情的執着から自らの原則に妥協してエルサレムに行くことになった過ちについて、記録を明らかにしています。その誤った訪問において、彼はギリシヤの異邦人教会から苦勞して集めた賜物を贈ることによって、その教会に対する以前の迫害(第二コリント 9 章 1-15 節; [ヘブル 10 章 33-34 節](#)参照)を「修復する」という強い願望も持っていたと思われます。

かつ、わたしに賜わった恵みを知って、柱として重んじられているヤコブとケパとヨハネとは、わたしとバルナバとに、交わりの手を差し伸べた。そこで、わたしたちは異邦人に行き、彼らは割礼の者に行くことになったのである。(10) ただ一つ、わたしたちが貧しい人々をかえりみるようにとのことであつたが、わたしはもとより、**この事のためにも大いに努めてきたのである。**(ガラテヤ2章9-10)

イエス・キリストの犠牲によって律法が完全に成就し、取って代わられたことについて、パウロがそれまで抱いていた明瞭さの欠如や、ユダヤ人の感情に配慮してその真理を伝えようとしなかったことは、この時点で完全に払拭されました。この手紙を書くにあたってパウロに課せられた唯一の問題は、これらの事実を明確にし、なおかつ頭ごなしに拒絶されるのではなく、受け入れてもらうにはどうすればいいかということだったので、ヘブル人への手紙は、パウロのように聡明で、彼のような特殊な人生経験を持ち、聖霊に力づけられ、導かれ、靈感を受けた人物だけがなし得るような、見事な方法でこの難題を成し遂げています。ヘブル人への手紙を少しでも注意深く読んで、それでも十字架の後に律法に従うことが聖書的だと信じる人はいません。

パウロは、彼の他の書簡(特にガラテヤ人への手紙)ですでに示されている原則、すなわち、モーセの律法に従うという古いやり方は、聖霊の賜物によって力を与えられたイエス・キリストの福音という新しく力強いぶどう酒には、今やまったく不適切であるということを、深く理解するようにならなければなりません。この教訓を学ぶには使徒たち全員にとって時間を要し、先に見たように多くの場合、彼らは苦難の道を歩まなければなりません<sup>8</sup>。

---

<sup>8</sup> 使徒行伝は、多くの点で、律法から恵みへの移行を記録することに費やされています。BB 6B: Ecclesiology, Section I.B.5.c [“The Nature of the Book of Acts”](#)参照。

使徒たちにとって律法から恵みへの移行が困難であったとすれば、ユダヤ人信徒たちがこの重要な変容に問題を抱えていたことは驚くべきことではありません。しかしエルサレムでは、前進というよりはむしろ、使徒たちや異邦人の教会が、明らかにそうであったように、パレスチナの信徒たちは恵みから律法へと逆戻りしていました。この逆転は、感傷的な理由もあれば、(不信仰なユダヤ人仲間から排斥された)社会経済的な理由もありましたが、エルサレム教会の指導者の失敗によるところも大きかったことは間違いありません。エルサレム教会の無名の人々がパウロに神殿の誓願を持つ若者を支援するように促したという事実は、この共同体がすでに律法遵守に逆戻りしていたことを示すだけでなく、ヤコブもユダもペテロもヨハネも、他の使徒も長老も、その教会で地位のある人物も、長老たちの誰一人として反対しなかったことを物語っています。パウロが同意したのは間違いでしたが、この時沈黙を守っていた人々に少なくとも部分的な責任がなかったかどうかは、問う価値があります。その七、八年前の時点から、事態は明らかに悪化していました。この事実は、その教会の「柱」となる者達の哀れな状態を示しています([ガラテヤ 2 章 9 節](#); [ガラテヤ 2 章 6 節](#)も参照)。

ヘブル人への手紙は、このように多くのことを同時に述べています。エルサレムの教会を迫害したパウロに代わって、記録を訂正し、(論理的な意味での)謝罪をしています。グノーシス主義の根本的な前提に対する簡潔な反論であり、律法の真の意味についての最も鋭い説明であり、聖書のどこにも見られない律法の陳腐化の最も鮮明な説明がなされています。加えて、この手紙は愛の労作であり、使徒の中で最も偉大なパウロが、彼らのために死をも厭わないほどの深い愛で愛した人々を、迫り来る背教から救い出そうとした最後の必死の試みなのです。この手紙を書いたとき、パウロの余命はあと数日か数週間しかありませんでした。だから、このヘブル人への手紙が、キリストのからだのために彼が行った最後の主要な働きとなったのは、いろいろな意味でふさわしいことだったのです。

神の言をあなたがたに語った指導者たちのことを、いつも思い起しなさい。彼らの生活の最後を見て、その信仰にならいなさい。([ヘブル13章7節](#))

あなたがたの指導者たちの言うことを聞きいれて、従いなさい。彼らは、神に言いひらきをすべき者として、あなたがたのたましいのために、目をさましている。彼らが嘆かないで、喜んでこのことをするようにしなさい。そうでないと、あなたがたの益にならない。([ヘブル13章17節](#))

上記のことは、本来言う必要のないことであり、ましてや外部の者によって語られるべきことではありませんでした。しかしもしエルサレム教会の柱である長老たちや著名

な使徒たちが、自分たちに委ねられた群れを正しく霊的に導いていたならば、『ヘブル人への手紙』全体は必要なかったはずです。教会時代の最初のペンテコステからエルサレムの滅亡に至るまで、神殿がなお存続していたわずか五十年にも満たない短い期間のあいだに、私たちは新約聖書の中で繰り返し、エルサレム教会の指導者たちが律法の元にあった古い信徒たちを正しく治めることに大きな困難を覚え、あるいは完全に失敗していた事例を見るのです(例えば、[使徒行伝 11 章 1-3 節](#); [15 章 1-5 節](#); [21 章 20-24 節](#); [ガラテヤ 2 章 3-5 節](#); [2 章 11-14 節](#))。ヘブル人への手紙の執筆時点で、エルサレム教会における霊的権威が完全に崩壊していたか、あるいは、その権威を行使すべき者たちが、少なくともその責任をほとんど放棄して、(モーセがいなくなったとたん、イスラエルの民の暴走を許したアロンのように:)圧力に屈して黙り込んでしまっていたことは、ヘブル人への手紙の状況から明らかです：[出エジプト 32 章 1 節](#)～；特に[出エジプト 32 章 25 節](#))。

しかし、出エジプトの場合のような異教というよりも、ヘブル人への手紙の扱う問題は、一方ではキリストの神性への信仰の欠如からグノーシス主義的・ユダヤ主義的神話に従うこと、他方では律法の儀式に立ち戻ることというグルになって仕掛けてくる二つの悪魔的攻撃に関係しています。エルサレムの指導者たちは、少なくとも一時的には、このような霊的に破壊的な流れに対して怖気づいて反対せず屈服していました。他の誰が反対できたでしょうか？ もしそれが使徒パウロ以外の者であったとしたら、他の誰がその割れ目に立てたのでしょうか？ パウロは、その生涯の最後の日々をエルサレムの教会を救出するための奉仕に費やして、さらに時代遅れの律法を打ち破りながら異邦人を受け入れることで大きく拡大しようとしていたイエス・キリストの教会のための究極の奉仕も行っていたのです。その必要な変革を、最もそれを受け入れたがらないであろう信徒たちに説明することは、教会時代初期の歴史における転換点の一つであったのです。ヘブル人への手紙は、私たちの主の十字架と復活、そして聖霊をつかわされたことがもたらした根本的な時代の転換について、紛れもない、議論の余地のない説明をしています。<sup>9</sup> ヘブル人への手紙を当時読んだ人も、いま読む人も、キリストの人性と神性、律法が恵みによって置き換えられたこと、そして新しい契約を喜んで

---

<sup>9</sup> サタンの反乱第五部：七つの千年期間、II.5節「人類史の五つのディスペンセーション的分割」参照。要するに、神の人類史の分割は、聖典によって、神が真理を「分配」する手段という観点から説明されています。ヘブル人への手紙の最初の節にあるように、十字架はイスラエルの時代と教会の時代との大きな分かれ目なのです。「神は、むかしは、預言者たちにより、いろいろな時に、いろいろな方法で、先祖たちに語られたが、この終りの時には、御子によって、わたしたちに語られたのである。」(ヘブル 1章1-2節前半)このトピックは、次回の「ヘブル人への手紙：第一章」でも取り上げます。

受け入れる代わりに古い契約へと立ち戻ることの致命的な危険について、疑う余地はありません。ヘブル人への手紙は、真理によって矯正されることを望むすべての人々に対して、律法主義との最終的かつ完全な決別を与え、またその後になおエルサレムにとどまっていた使徒や指導者たちが(聖書正典を完成させる働きの中で)努力していたことから判断するに、エルサレムにおける指導層にとっても一種の「立て直し」となったのです。

特にローマ人への手紙、ガラテヤ人への手紙、ヘブル人への手紙では、パウロが独力で新約と旧約との関係を明らかにし、教会内のユダヤ人と異邦人が、全く異なる霊的背景を持ちながらも、キリストにある同胞として共存するだけでなく、完全に調和するための靈感に満ちた道しるべを示しました(例えば、[ローマ 15 章 8-9 節](#); [ヨハネ 17 章 11 節](#), [17 章 20-23 節](#); [ローマ 12 章 16 節](#), [15 章 5-6 節](#); [第一コリント 1 章 10-17 節](#); [第二コリント 13 章 11 節](#); [エペソ 4 章 3 節](#); [ピリピ 2 章 2 節](#), [4 章 2 節](#)参照)。ユダヤ人も異邦人も同じように、すべての信者にとって、儀式や権威を喪失してしまった伝統から離れ、代わりに神の恵みにある御霊の力に目を向けることは、当時も今も、私たち個人の霊的成長にとって、またキリストのからだの集団的成長と健康にとって絶対不可欠なことなのです。ヘブル人への手紙は、このような重要な問題を説明する鍵であり、私たちはこの書を手にすることで少なからぬ祝福に与っているのです。

## IV. ヘブル人への手紙の概要と意識

### 概要：

ヘブル人への手紙の目的は、律法がイエス・キリストにおいて成就したことを示し、古いものを誤って適用して(グノーシス主義と律法主義という二つの形で)、新しいものすなわち真理を拒む愚かさを明らかにすることにあります。近い将来、反キリストはユダヤ人だけでなく異邦人、信者と不信者の双方に対して、同様の試練をもたらします。獣(反キリスト)は、外見的には伝統的ユダヤ教、すなわち律法と神殿儀式に基づいた宗教を持ち、それと同時に、歴史的ユダヤ・グノーシス主義に似た「神秘」による多くの幻想を提供することになるでしょう。一世紀のエルサレムにいた信者たちは、この二つの誘惑のいずれにもつまずきました。前者(律法主義)については身の安全を守ろうとする懸念からでした(将来「獣の刻印」がなければ売ることも買うこともできなくなる状況と比較できます[[黙示録 13 章 13-14 節](#)参照、[マタイ 24 章 10-13 節](#)と比較])。後者(グノーシス主義)については「秘められた事柄」に対する病的な好奇心によるものでした(反キリストの偽預言者が行うしるしや不思議と比較できます[[黙示録 13 章 13-14 節](#)参照、[マタイ 24 章 24 節](#)と比較])。ですから、私たちが艱難期の入り口に立っている今、ヘブル人への手紙は、近い将来私たちすべてが直面するであろう救いに対する最も陰險な脅威に対抗するためのきわめて時宜にかなった実際的な防御策を与えてくれるのです。同時にそれは、私たちを救ってくださった愛する主イエス・キリスト、そしてこれから来たる困難な時代を安全に導いてくださる唯一のお方について、多くの祝福されたすばらしい真理を明らかにしています。

### 意識：

以下に示す章ごとの広範な概要に加えて、各章の意識を続けて掲載します。これらは翻訳ではなく、各章の内容について、単なる逐語的で忠実な翻訳以上に深い理解を与えることを目的としたものです。今後の本シリーズでは、各章の実際の翻訳を提示したうえで、そこに含まれる問題点の考察や、各節に秘められている重要な教理的真理についての詳細な議論を行う予定です。しかし現時点では、この意識によってヘブル人への手紙の背景が明らかにされ、読者にその本質的な内容についての基本的な理解が与えられることを願っています。

## 1章 :

神の御子:イエス・キリストは、父なる神の唯一無二の使者であり、まさに神の御子、人となられた神であります。彼は目に見えない天使的戦いにおいて勝利を収められ、そのゆえにあらゆる点において御使いたちにまさっておられるのです。

御子は神のことばであり、父なる神の使者であり、またメッセージそのものでもあります。御子は世に來られたことによって、今や永遠の門口に立つ私たちに対して唯一無二の存在として、明確に啓示されています。したがって、御子は、かつて神が真理を伝えるために用いられた数多くの方法や手段に比べて、本質的に優れておられるのです。御子は父なる神の真の相続人であり、創造されたすべてのものを受け継ぐ相続人であります。実際、御子こそがすべてを創造された方です。イエス・キリストは神であられ、この方が神のことばとしての御力ある御言葉によってこの創造を支えておられなければ、何ひとつ存在し続けることさえできません([コロサイ 1 章 16-17 節](#))。御子は人類すべての救い主であり、ご自身の血、すなわち十字架における私たちのための犠牲をもって、この目に見えない天使的叛逆の戦いに勝利を収められた方です。御子の御業は父なる神によって受け入れられ、その復活、昇天、そして父の右の座における栄光の着座を通して証しされ、確証されています。それにもかかわらず、あなたがたの中のある者が陥っている誤ったグノーシスの教えを考えれば、御子が御使いたちにまさっておられることに、はたして何の疑いの余地があるでしょうか。

聖書を考えてみてください。父なる神は、御子イエスに対しては「わたしの子」と呼ばれましたが([詩篇 2 篇 7 節](#))、御使いたちの誰かひとりでもそのように呼ばれたことがあったでしょうか。ありません。さらに父は、御使いの誰かの「父」となると明言されたことはありませんが、メシヤについてははっきりとそう語られました([サムエル記下 7 章 14 節](#))。実際、父はメシヤが再臨される時に、御使いたちすべてに対してメシヤを神として拝むように命じておられるではありませんか([詩篇 97 篇 7 節](#))。また御使いが神のしもべとして明確に描写されている一方で([詩篇 104 篇 4 節](#))、メシヤについては、全地に及ぶ義なる統治の完全さゆえに神と呼ばれ、またその統治を委ねられたことによって父から讃えられていると、聖書に書かれているのを読んだことがあるでしょう([詩篇 45 篇 6-7 節](#))。さらに、メシヤによる世界の創造が描写され、このお方がご自身で創造されたこの世界の一時的性質と、このお方ご自身の永遠の支配とが対比され、まさにその箇所においてこのお方の永遠の存在が確認されているのを読んだことがあるでしょう([詩篇 102 篇 25-27 節](#))。これらのことが御使いについて語られたことは決してありません。父なる神が御使いに向かって、「わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまで、わたし

の右に座していなさい」([詩篇 110 篇 1 節](#))と言われたことがあるでしょうか。ありません。御使いたちは実際にはしもべなのです。そうです。御使いたちは、私たちのために、すなわち、私たちのために死んでくださったイエス・キリストと共に救いの共同の相続人とされた信者たちのために、御子によって遣わされているのです。

## 2章:

私たちが救われるためには、イエス・キリストが人となられ、律法における動物のいけにえが単なる象徴にすぎなかったのとは対照的に、私たちの罪のために実際の贖いを成し遂げられなければなりませんでした。

これまでに語られたこと——すなわち、キリストの神性の確かな証拠と、その人としての姿においてさえ御使いたちにまさっておられるという事実——の重大さを考えるとき、あなたがたは危険な考えに心を傾けることをやめ、またキリストによってすでに成就された律法の象徴に立ち戻ることをやめ、悔い改めることが何よりも大切です。さもなければ、キリストから完全に離れ、背教に陥ってしまう危険があるのです。思い出してください。律法でさえ、仲介者として仕える天使たちを通して授けられたものなのです——しかし、その天使たちに対しても、キリストは限りなく優れておられるのです。しかも、そのように影にすぎない律法においてさえ、すべての違反は厳しく罰せられました。では、今や救い主としてはっきり示されているキリストご自身を退けることは、どれほど大きな罪となるでしょうか。神の御子による本当の救いを軽んじるなら、誰が神の裁きを逃れることができるでしょうか。この救いの知らせは、まずイエスご自身が宣べ伝えられ、その後の時代においては、父なる神ご自身がしるしや不思議、さまざまな御力のわざをもって証しされました。そして、聖霊の賜物が分け与えられることによっても証明されています——それは律法の時のように御使いを通してではなく、神から直接与えられた祝福なのです。

そして、千年王国においてキリストと共に統治を分かち合うのは御使いたちではなく、わたしたちであると聖書は証ししています。「神はこの世界を御使いに服従させたのではなく、人に服従させられた」と書かれているとおりです([詩篇 8 章 5-7 節](#))。もともと、この世界が人に完全に従うことは、まだ実現していません。イエス・キリストは、一時的に御使いよりも低い者となられ、死を受け入れることによってわたしたちすべてを救う必要があったからです。そして、その十字架における勝利のゆえに、今やキリストはすべての御使いを超えて、栄光と誉れの冠を受けておられます。わたしたちが救われるためには、「万物がそのために存在し、またそのゆえに存在する」方、すなわち主イエス・

キリストが、苦しみを通して——すなわち十字架によって——神のご計画を完成させることが必要でした。彼こそがわたしたちを神の子として救いに導き、その救いの道を「切り開いてくださった」方なのです。御血によってわたしたちを買い取り、聖なる者としてくださった救い主と、その救い主によって聖められたわたしたちとは、同じひとりの天の父に属しています。だからこそ救い主は、聖書が預言しているように、わたしたちを兄弟と呼ぶことを喜ばれるのです。[詩篇 22 篇 22 節](#)では、花嫁であるわたしたちへの愛を語り、[イザヤ書 8 章 17 節](#)では、わたしたちが主に属する者として彼に信頼を寄せることを示し、さらに[イザヤ書 8 章 18 節](#)では、わたしたちが永遠にひとつとされる姿を描いています。

わたしたちが人間である以上、イエスもまた人となられ、わたしたちの罪を人としてのその御体に負い、贖いの代価を払ってくださらなければ、救いは実現しませんでした。主がわたしたちのために受けてくださったその霊的死によって、サタンがわたしたちに対して持っていた力——それは、もし希望がなければ私たち皆が直面せざるを得なかった死の恐怖が持つ支配力のことですが——その力から私たちは救われ、その恐れから解放されたのです。かつてはその恐れに縛られて、事実上、悪魔に仕え、偽りの希望を与える虚しい体系に奴隷とされていたのです。キリストがこのようにして救い出されたのは御使いたちでしょうか？ いいえ、そうではなく、わたしたちなのです。わたしたちの大祭司として、あわれみ深く忠実にご自身を犠牲として献げてくださるために、永遠の神であられるイエスは、わたしたちと同じ真の人間とならなければなりません。単なる儀式的な象徴ではなく、罪のための完全な犠牲として、御血と十字架における霊的死によって、実際にわたしたちの罪を贖ってくださったのです。主はその霊的死に至る前に厳しく試され、すべての罪のために死ぬという想像を絶する苦しみを味わわれました。ですから、イエスはご自身の血と霊的死によって贖われた救いを与えてくださる究極の助け主であり、また救われたわたしたちを今もあらゆる面で助けてくださることがおできになります。なぜなら、主は人間の苦しみがいかなるものかをご自身で身をもって知っておられるからです。そのためにこそ、イエスは完全なとりなし手でもあられるのです([ローマ 8 章 34 節](#); [第一ヨハネ 2 章 1-2 節](#))。

### 第 3 章:

イエスは、いけにえを含む律法を仲介したモーセにまさっておられます。出エジプトの世代が不信仰と反逆に陥った過ちを避ける必要があります。

それゆえ、あなたがたは動物の血ではなくキリストの血によって聖められた者なので

す。そして、天に属するキリストの集会、すなわち主の教会に召され選ばれた者となったのです。その教会は、あなたがたが今なお妥協して属している地上の集会よりも、はるかに優れているものです。ですから、永遠のいのちの確信をあなたがたが誰に基づいて持っているのかを、よく考えなければなりません。それはまことの大祭司であり、律法を成就し、また律法に代わるために父から遣わされた方、わたしたちの主イエス・キリストなのです。その方こそ、律法を成就し、置き換えるために御父から遣わされたまことの大祭司、わたしたちの主イエス・キリストなのです。イエスは、まことの犠牲を成し遂げるために御父から遣わされた使命において、忠実であることを完全に証明されました。それはちょうど、モーセが単にその犠牲を象徴する「家」を建てることにおいて忠実であったようにです。家を設える者がその家自体よりも優れているように、キリストのなさったことの栄光はモーセよりもはるかにまさっています。モーセは、いわばその象徴的な家に仕えるしもべにすぎませんでした。これに対して、キリストは御子としてその家を治める支配者であり、しかも私たちこそがその家なのです。すなわち、キリストがご自身の血によって買い取られた教会です。ですから、もし私たちが救いの確信を終わりまでしっかりと大胆に持ち続けるならば、その家であるのです。

この点で、私はあなたがたのことを案じているのです。あなたがたは、律法が初めて与えられた出エジプトの世代を思い起こさせます。聖書は、彼らが神に対して心をかたくなにし、四十年の間絶えず神を試みたことを警告しています。その結果、主は怒りのうちに彼らに誓われました、「彼らは決してわたしの安息に入ることはない」と([詩篇 95 篇 7-11 節](#))。ですから、あなたがたのうちのだれもが、同じような行いによって不信仰の悪い心を抱き、生ける神から離れ去ることのないように、十分に気をつけなければなりません。むしろ、罪の欺きによって心がかたくなにされることのないように、互いに励まし合いなさい。そしてそれは、「今日」と呼ばれている間、すなわち、私たちがまだこの世にあって主の再臨を待ち望んでいる間、続けるべきなのです。というのも、私たちはキリストのからだの一部となり、復活の時にそこに結びつけられているすべての祝福にあずかることになるからです——ただし、その確信と信仰を終わりまで堅く持ち続けるならばです。

さて、いま引用した詩篇において、「もしあなたがたがまことに御声を聞いたなら、心をかたくなにしてはならない」([詩篇 95 章 7-8 節](#))と書かれているのはどういう意味でしょうか。では、かつて御声を聞きながらも、かえって神に逆らって苦々しい思いを抱いたのは誰だったのでしょうか。それはモーセに導かれてエジプトを出たあの世代全体ではありませんか。そして、四十年のあいだ主が怒りに向けられたのは誰に対してだったのでしょうか。それはまさに、主に背いて罪を犯し、その結果としてその骨を荒野にさらされた反逆者たちではありませんか。さらに、主が「彼らをわたしの安息に入らせない」

と誓われたのは誰に対してだったのでしょうか。それは従わず、信じなかった者たちに対してではありませんか。私たちははっきりと見てとるのです。わたしたちは、あなたがたの先祖が神の約束された「安息」に入ることができなかったのは、まさに彼らの不信仰のゆえであることを、はっきりとわかります。そしてその不信仰は、彼らの行いによって裏づけられていました。その行いは、今のあなたがたの様子にもよく似ているのです。

## 第4章:

イエスは(律法の安息日とは対照的に)、真の安息日の創始者であります。イエスは生ける神の言であり、まことの大祭司として、安息日(およびすべての祭り)が持っていた儀式的意味をすべて成就された方です。

これまで述べてきたことを続けると、出エジプトの世代は「安息」に入ることに失敗しました。すなわち、主を信頼せず、したがって信仰の安息を象徴する約束の地に入ること許されなかったのです。あなたがたは同じ過ちを犯さないよう細心の注意を払うべきです。というのも、私たちが今取り上げている詩篇 95 篇において、詩人は「今日」こそがその安息に入る日であると語り、心をかたくなにしてそこに入らないことのないよう警告しているからです。これは、信仰による安息への約束が今まさにあなたがたにも与えられていることを意味しています。ですから、あなたがたはそこに入ることを拒むことのないよう非常に注意すべきです。神のまことの安息は、出エジプトの世代が心の中でエジプトに引き返したように、あなたがたが好んで頼り、再び戻ってしまった律法の行いによってではなく、信仰によって入るものだからです。出エジプトの世代にもあなたがたと同じように救いの福音が告げ知らされました。しかし彼らの場合、それは何の益にもなりませんでした。というのも、彼らがそれを信じることを拒んだからです。その信仰のない行動からも明らかです。信じる者だけが信仰の安息に入るのです。結局のところ、私たちの詩篇には、主が彼らに対して「彼らはわたしの安息に入ることはない」と誓われたと書かれているのです。そしてこの言葉が語られ、記されるよりはるか以前に、再創造の第七日における最初の安息日があったことはもちろんです([創世記 2 章 2 節](#))。そして、出エジプトの世代が信仰の安息に入ることを拒んだので、神は別の日を定められました。それが詩篇 95 篇にある「今日」であり、これはその反逆の世代が過ぎ去ったずっと後に書かれたものです。彼らが入らなかったのは、主への信頼と忠実さを欠いていたからです。そして、その子らさえもこの「安息」に達しませんでした。なぜなら、もし詩篇 95 篇が第二世代の約束の地へ入ることを指していたのであれば、その何世紀も後に生きた詩人が「今日」こそ安息に入る日であるなどと言うはずがないからです。したがって、神の民には真の「安息日」が残されています。それは儀式的な安息日を

守ることの成就である、霊的な安息なのです。その真の信仰の安息に入った者は、救いを得る手段として律法に頼ったり、あるいは「グノーシス的戦い」と称するものに従事したりするような、自分の業によって救いを得ようとする努力をやめたのです。ちょうど神ご自身が、最初の安息日に世界を再創造するわざをやめられたようにです。ですから、私たちは真の信仰の安息、すなわち主を信頼することによる安息に入るよう、あらゆる努力を払おうではありませんか。律法の行いによっては救われず、むしろそれに立ち戻ることは滅びにつながります。そうならないために、彼らが陥ったような、不従順と不信仰の罠に落ちないようにすべきなのです。

主は、わたしたちの心の奥底にあることをすべて知っておられます。反逆は、神の御言葉そのものであられるお方の御前に隠すことはできません。さらに、わたしたちには書かれた御言葉が与えられており、もし誠実にこれに向き合い、聖霊の御声に耳を傾けるなら、その御言葉はすべての偽りを突き破り、わたしたちが信じ込んでしまった虚偽の教えを明らかにし、耳を貸してしまった欺きの言葉を退け、心の深みまで鋭く貫くのです。ゆえに、律法の儀式(あるいはそれを歪めたグノーシス的な虚構)へと逆戻りするのではなく、わたしたちは、まことの大祭司、神の御子イエス・キリストを信じる信仰によってすでに救われていることを思い起こさねばなりません。主は、わたしたちの罪のために御自身を犠牲としてささげるため、真の人として世に来られました。ゆえに、人間であることの意味を、その身をもって余すところなく体験しておられるのです。そして、人の生の苦しみという苦杯を余すところなく飲み干された方として、イエスは、あなたがたが今置かれている重圧や、受けている排斥に深く同情してください。すなわち、あなたがたの今の背きと深く関係している誘惑を理解してください。彼はあなたがたと同じあらゆる重圧と誘惑を受けられましたが、あなたがたのようにそれに屈することは一度もありませんでした。ですから、不信仰によってあきらめるのではなく、むしろ大胆に彼のもとに願いを直接持って行きましょう。そうすれば、恵みと憐れみ、そして時宜にかなった助けを、恵みの御座に着いておられる主ご自身から確かに受けることができるのです。

## 第5章:

イエス・キリストはまことの大祭司であり、その霊的犠牲こそが御父に受け入れられる真の犠牲です。あなたがたは本来すでにこれを知っているはずなのに、再び後戻りしてしまったのです。

モーセの律法のもとにある大祭司たちでさえ、ただの影にすぎない犠牲をささげており、それらはイエスが私たちのためになされる真の御業を指し示すものでした。そし

て彼らは自らも罪人であるがゆえに、私たちと同じく試練の重圧を知っています。そのために彼らは民のためだけでなく、自分自身のためにも犠牲をささげねばならなかったのです。たとえ「大祭司」と呼ばれる者であっても、彼らはあくまでキリストと、そののちに成就された犠牲を象徴する存在にすぎません。しかしそれでも、人間の祭司たちでさえ自らの意思でその尊き務めについたのではなく、神によって召されて任ぜられたのです。ましてやキリストにおいては、聖書が証するように([詩篇 2 篇 7 節](#))([詩篇 110 篇 4 節](#))、その召しはまさしく御父から直接与えられたものです。

十字架の犠牲、すなわち「キリストの血」は、私たちの理解を超える奥義です。しかしキリストは、それに伴うすべての想像を絶する痛みと苦しみをも耐え忍び、完全なる生涯と、御父が求められたすべてを完全に成し遂げられたゆえに、それを通して御救いに至られました。したがってキリストは——罪そのものの経験ではなく(キリストは罪なきお方であり、私たちのために犠牲となられねばならなかったからです)——この世の罪の代価を支払うとはどういうことかという、人間としての真実の経験を持っておられるのです。まさにその最も偉大な勝利によって、キリストは私たちに救いの門を開かれました——もし私たちが主を信じ、そしてもし忠実にとどまるならば。ところが、あなたがたは今、グノーシス的幻想に耽り、罪に陥り、律法の死んだ行いに立ち戻ることによって、その救いから落ちかかっているのです。心に留めなければならないのは、キリストの現実にして有効な罪の犠牲——すでに成し遂げられ、完成された犠牲——のゆえにこそ、御父はキリストを唯一無二の大祭司として任命されたという事実です。地上の祭司たちが動物の犠牲によって象徴的に示したものを、ただ一人、実際に成就し、救いをもたらすことのできる大祭司となられたのです。

あなたがたが律法に立ち戻り、また罪や幻想に迷い込む行いによって示しているのは、これら基本的な真理を忘れてしまっているということです。そのため、より高度な原則を教えることができなくなっているのです。恥ずべきことです！ あなたがたはこの時まで、他の人々に真理を教えるべき立場にあるはずなのに、むしろ必死に再び、キリスト信仰の最も基本的な原理を教えられる必要がある状態なのです。あなたがたは再び霊的な乳児に逆戻りし、まだ堅固な教理の糧に慣れていないのです。母の乳を必要とする者は皆、赤子にすぎません——霊的な意味では、私たちの真の義が律法の行いやグノーシス的な「戦い」からではなく、キリストへの信仰から来ることを忘れてしまっている人のことです。あなたがたが本来慕い求めるべき「堅固な食物」、すなわち霊的成長と主への真実な奉仕へと導く深い教えの真理は、赤子のためではなく、霊的に成熟した人たちのためのものです。すなわち、真理を継続的に学び、適用することによって、その感覚を訓練し、何が善で正しいことであり、何がそうでないかを見分け、そのうえで正しく行動する人たちのためのものです。ところが、あなたがたはまさにその反対をしているのです。

## 第6章:

エルサレムの信者であるあなたがたは、その行いによって、最も基本的な教理を忘れてしまっているように見えます。このまま進めば、ただ背教に至るだけであり、あなたがたが望むところでは決してありません。神があなたがたに与えられた約束は、神ご自身の誓いによって確かなものとされ、安全かつ揺るぎないものなのです。——ただし、あなたがたが最後までしっかりと信仰を保ち続けるならばのことです。

基本的な教えから離れ、霊的な成熟へと進むべき時が来ています。悔い改めについての教えを、あなたがたは覚えていないのですか。しかし、あなたがたは以前の行動に逆戻りしてしまっています。救いに至る信仰についての教えを、覚えていないのですか。しかし、あなたがたは出エジプトの世代と同じように、不信仰な態度をとっています。バプテスマについての教えを、覚えていないのですか。霊によるバプテスマこそが教会のバプテスマなのです。しかし、あなたがたは律法に属する儀式的なバプテスマに戻ってしまっています。信者の復活と、不信者に対する最後の裁きについての教えを、覚えていないのですか。しかし、あなたがたは前者ではなく後者に属そうとしているかのように振る舞っています。

つまづいてしまったあなたがた——かつて真理の光に導かれ、聖霊を与えられ、真理によって啓蒙され、並外れた奇跡を見せられたあなたがた——が、今まさに律法の儀式に再び参与することでイエス・キリストを公然と辱め、あたかも再び十字架につけているかのようにしている間は、霊的な以前の状態に回復することはできないのです。良い作物を実らせる地を祝福し、とげを生み出す地を火で焼き払うとするならば、今あなたがたが生み出しているこの茨と荊の産物がいかに危険なものであるか、よく考えなければなりません。

このような言い方をせざるを得ませんが、私はあなたがたが立ち返り、最終的には救われると確信しています。神は、あなたがたがこれまでにキリストと兄弟姉妹たちのために行ってきた良きわざを、そして今も続けている奉仕を、決してお忘れになりません——ただし、完全に背き去ることさえしなければのことです。あなたがたは、永遠の報いに対するその確信を再び奮い立たせ、最後まで堅く保ち続けなければなりません。怠惰にならず、むしろ信仰と忍耐と持久によって神に属する者に約束された嗣業を完全に受け継いだ、先人の偉大な信仰者たちに倣うべきなのです。もし私たちがキリストと共に歩んでいるなら、その嗣業に対して確信を持つことは当然の権利です。永遠の嗣業を与えるという約束を、神ご自身が私たちの先祖アブラハムにお与えになったでは

ありませんか。そして神は、それを必ず実現させるために、ご自分以上に誓うべき相手がいないので、ご自身によって誓われました。アブラハムは、その約束を信じ、忍耐して待ち望み、信仰をもって従ったことにより、その誓約の保証を受けたのです。神は、すでに約束を与えられていたにもかかわらず、さらにご自身によって誓約を与えられました。それは疑う余地を残さないためです。人が誓うのはまさにそのためであり、神ご自身がご自身によってなされた誓い以上に確かな保証は存在しません。この誓いによって確証された救いと報いの約束は、信仰に忠実であり続ける者に与えられた天からの錨であり、常に真実しか語られない神ご自身によって与えられたものなのです。それは、来たるべき素晴らしい事柄に対する将来の希望に避け所を見いだした私たちを、堅固に、そして確実に結びつけるものです。まるでこの世のいのちにおける錨が天へと届き、父と子がおられるまことの至聖所にまで達しているかのようです。そしてまさにそこに、イエスは私たちのために先駆けて入られ、いわば道を切り拓いてくださったのです。真の、唯一の大祭司——王であり祭司であるメルキゼデクのように——イエスこそ、垂れ幕の奥に入り、天に至る道を私たちのために開いてくださったお方なのです。

## 第7章:

メルキゼデクはキリストの予型でした。彼の王なる祭司職は、私たちの主が王の王であると同時に大祭司であられるという二重の地位を明らかにしています。この祭司職の交代は、律法が今やより優れたものによって置き換えられたことをも示しているのです。

私がこれまでにメルキゼデクについて([ヘブル5章10節](#), [6章20節](#))説明してきたことは、要するに次のことです。メルキゼデクは、唯一無二の存在として、王であると同時に祭司でもありました。すなわち、サレム(後のエルサレム)の王であり、「いと高き神」(ヘブル語で 'El-'Elyon, エル・エリオン)、すなわち「唯一まことの神」に仕える祭司であったのです。祭司としての務めにおいて、メルキゼデクはアブラハムを祝福し、アブラハムはその務めに応じてメルキゼデクに十分の一を納めました。ところが、聖書にはメルキゼデクの系譜も、誕生や死の記録も一切ありません。これによって、彼は[詩篇110篇4節](#)にあるように、神の御子を表す完全な「予型」となっているのです。というのも、キリストの祭司職は実際には永遠のものであり、その点がメルキゼデクについて聖書が語る事柄によって象徴され、前もって示されているからです。この類比からすれば、キリストはアブラハムよりも大いなる方です。なぜなら、キリストの予型であるメルキゼデクがアブラハムから十分の一を受けたのであって、その逆ではなかったからです。同じくこの類比から、キリストはアブラハムよりも大いなる方です。なぜなら、キリストの予型

であるメルキゼデクがアブラハムを祝福したのであって、その逆ではなかったからです。そしてレビ族がみなアブラハムの子孫であるという事実は、実際には彼ら自身もまたメルキゼデクに十分の一を納め、さらに彼から祝福を受けたことを意味しています。すなわち、「小さい者が大きい者から祝福を受ける」という原則がここにも当てはまるのです。これはさらに、キリストの大祭司職が律法に属するレビ族の祭司職よりも、あらゆる点で優れていることを象徴しています。律法の祭司職はレビ族から出ているのに対し、キリストの祭司職はそれを超越しているのです。

結局のところ、もしモーセの律法における祭司職が真の救いをもたらすことができたのなら、「メルキゼデクの位に等しいもうひとりの祭司」の必要について、聖書が言及するはずがあったでしょう。祭司職の変更は、まさに私たちの真の大祭司であるキリストがご自身を十字架において犠牲としてささげられたことによってもたらされたものであり、それは必然的に律法の変更も伴います — すなわち、モーセの律法から御霊の法則への変更です([ローマ 8 章 2 節](#), [第二コリント 3 章 6 節](#))。モーセの律法によれば、すべての祭司はレビ族でなければなりません。しかしキリストは、その人としての性質においてユダ族から出られたのです。さらに言えば、この新しい大祭司は、一時的で世襲的な任命によって仕えるのではなく、永遠のいのちの力によって仕えられるのです。聖書が「あなたは**永遠に**祭司である」([詩篇 110 篇 4 節](#))と記しているとおりです。このことのゆえにこそ、律法は退けられたのです。すなわち、律法そのものは救いをもたらすことができず、ただ、私たちの罪を取り除き永遠のいのちへの門を開いてくださるお方の到来を予表することによって希望を与えていたにすぎません。そしてこの希望によってこそ、私たちは実際に神に近づくのです。

キリストはレビ人たちのように肉による世襲で大祭司となられたのではなく、御父からの直接の委任を、御父ご自身の誓いによって受けられました([詩篇 110 篇 4 節](#))。このことによってこそ、キリストは旧い契約にまさる契約、新しい契約—すなわち、十字架において私たちのために成し遂げられた御業を信じることによる永遠のいのちの契約—の保証人となられたのです。レビ人の務めは命の続く限りのものでしたが、キリストの大祭司としての務めは、御自身が永遠であられるように永遠であり、その務めを通して私たちを救い、常に執り成しておられるのです。したがって、イエスは救いを求めて御もとに来るすべての者を完全に救い、またすでに信仰によって救われた私たちのために絶えず執り成してくださることができるのです。このような大祭司こそ、私たちに必要な方なのです。すなわち、罪深い人間であって儀式的な行為しか行えない者ではなく、真に救いと助けをもたらしてくださるお方です。キリストは聖であり、汚れなく、欠けることなく、罪人から完全に分離され、天よりも高く昇り、御父の御前におられます。人間の祭司たちは日ごとに、まず自分自身の罪のため、次に民の罪のために犠牲をささげねばなりません。しかしイエスは、御自身には罪がなかったので、自らを罪なき

犠牲としてただ一度限り十字架にささげ、世の罪を取り除かれました。この唯一の犠牲によって、すべては成し遂げられたのです。モーセの律法が任命した大祭司はしょせん人間にすぎませんでしたが、今や律法に代わって来られた神の御子は、御父の誓いによって永遠の大祭司と定められ、律法には決して成し得なかった完全な救いを成し遂げられたのです。

## 第8章:

イエス・キリストはまことの大祭司であり、私たちの救いに不可欠な、真に効力ある犠牲をささげられたお方です。そのゆえにこそ、私たちは今、新しい契約に与っているのです。なぜなら、キリストが古い契約を成就されたからです。

これらすべてが意味するところは、イエス・キリストこそがまことの大祭司であり、私たちの救いのために不可欠な、効力ある犠牲をささげられたお方であるということです。主は地上の神殿に入り、単なる儀式的な犠牲を行われたのではなく、天にあるまことの至聖所に入り、父の右に着座されることによって、その犠牲が完全に受け入れられたことを証されたのです。すべての祭司は犠牲をささげなければなりません。ですからイエス・キリストもまた犠牲をささげられました。それはご自身の血、すなわち十字架における万民の罪のための霊的な死です。もし主が地上の祭司であつたなら、律法の定める儀式的な犠牲をささげたことでしょう。しかしそれらは、主が成し遂げられるべき、そしてすでに私たちのために成し遂げられた大いなる罪の贖いを、ただ前もって指し示す影にすぎませんでした。地上の祭司たちが仕えている聖所は、父なる神のまことの住まいを写し取った単なる複製にすぎません。実際、モーセもまた、地上の聖所を天にある型に従って造るように命じられていました([出エジプト記 25 章 40 節](#))。しかし、私たちの主がささげられた犠牲は、地上の祭司たちによる儀式的犠牲とは比較にならないほど優れており、彼らの犠牲によっては決して成し得なかった罪の除去を実際に成し遂げられたのです。ゆえに、イエスは私たちに新しく、より優れた契約を確立してくださいました。すなわち、復活と永遠の命、そして信仰による嗣業という、より優れた約束に基づいた、神の祝福を授けてくださる新しく、より優れた契約です。

結局のところ、神はすでにエレミヤを通して([エレミヤ書 31 章 34 節](#))、古い契約を新しい契約に置き換えると預言しておられました。言い換えるなら、神は古い契約に欠陥を見いだされたとも言えるでしょう。なぜなら、イスラエルの民はその契約を最後まで守り通すことが決してできなかったからです——そして実際、それこそが要点でした。すなわち、古い契約は私たちが救い主を必要としていることを示すものでした。新しい契

約においては、その聖句が告げているように、神は真理を石にではなく、信じる者の心に直接書き記し、彼らの罪をすべて赦されるということです。これこそが、イエスのご自身の血によって確証された新しい契約なのです。主は、私たち罪ある人間には決して守り通すことのできなかつた古い契約とそのすべての規定を成就されたのです。よく心に留めてください。この契約を「新しい」と呼ぶことによって、父なる神は古い契約——すなわちモーセの律法を——すでに廃れたものとされたのではありませんか。確かにそうです。そして、このように廃れ、置き換えられたものは、やがて完全に消え去る寸前にあるのです。そしてそれは当然のことです。なぜなら、その目的はすでに成就されたからです——すなわち、イエスが来られ、この世の罪のために死んでくださったのです。ですから、なぜあなたがたは、まもなく完全に消え去ろうとしているものに、なおも立ち返ろうとするのですか。

## 第9章:

幕屋とその儀式は、キリストの実際の犠牲を象徴する影にすぎず、大祭司が贖罪の日に至聖所へ入ることは、キリストが十字架の勝利の後に御父の御前へ入られることを表す写しでした。私たちを救う血は動物の血ではなく、キリストの血——すなわち、私たちの罪のために裁かれてくださった彼の霊的死なのです。

律法は、幕屋に関わるさまざまな儀式を定めており、その幕屋には、あなたがたもよく知っているように、第一の部分である聖所と、第二の部分である至聖所のために特別な器具が備えられていました。ほかの祭司たちは、定められた儀式を行うために毎日聖所に入りますが、至聖所に入るのは大祭司ただ一人、しかも一年に一度の贖罪の日だけでした。その際も民全体の罪のため、そして自分自身の罪のために贖いを行うためであり、犠牲の血なしに入ることは決してありませんでした。これは御霊が示しておられることなのです。すなわち、父なる神の御前に入る道はまだ開かれていなかった、ということです——幕屋や当時の神殿に関わる単なる象徴的な犠牲によっては、それは不可能だったのです。なぜなら、それらの儀式は、だれの心や良心をも本当に清めることはできず、罪に関して父なる神の正義に応えることのできるものではなかつたからです。これらの犠牲は、ただの影であり、儀式であり、しきたりにすぎませんでした。それらは、やがて神ご自身が罪のための唯一有効な犠牲——ご自身の愛する御子、私たちの主であり救い主イエス・キリスト——を備えてくださる時を指し示していたのです。

真の大祭司であられるイエスは、地上の神殿の至聖所に入られることは決してありませんでした——それは無意味だからです。主は昇天の際、**まことの至聖所**、すなわち

父なる神の御座そのものに入られました。そこで、主が十字架で成し遂げられたわざは父によって承認されたのです。それは、何らかの文字通りの血を流したことによるのではなく、私たちの罪のために主が死なれ、十字架上の暗闇の中で御霊の死によって一度限りで完全に代価を支払われたことによる、真実の贖いでした。もし動物の血でさえ儀式的な清めに効果があったのなら、ましてや主ご自身の実際の霊的な死、すなわちキリストの血 — 聖霊によってささげられたこの供え物 — が、あなたがたが再び戻ってしまった律法の死んだ行いから、私たちの心と良心を真に清めることはないと思うのですか。したがって、キリストを信じ、忠実に従っていくことこそ、生ける神に仕える唯一のまことの道なのです。

まさにこの勝利、すなわち私たちの罪のためにキリストが霊的な死を遂げられたことによってこそ、第一の契約が示すことはできても清めることのできなかったものが実現し、イエスは私たちの仲介者となりました。イエスは実際に私たちと御父との間に平和をもたらしてくださったのです。つまり、永遠の相続という約束に召されたすべての人にとって — それは律法が単に象徴していただけのものをはるかに超えた、より優れたものなのです。いかなる契約も、また遺言も、その遺言者の死なしには発効せず、死後にはじめて効力を持ちます。そのため、律法の儀式には常に動物の血が伴っていました。すなわち、それはやがて来られるキリストの死を象徴しており、その死こそが背後にある約束に力を与えるものだったからです。だからこそ、それは「契約の血」と呼ばれ、モーセはすべてのものに血を注ぎかけ、律法に関わる一切のものが血によって清められたのです。そして「血の注ぎ出しなしには罪の赦しはない」のです。律法の下における赦しはあくまで儀式的なものにすぎませんでしたが、それはやがてキリストの血によって与えられる真実で効力ある赦しを前もって指し示していたのです。

このゆえに、地上の幕屋や神殿が単なる象徴にすぎない動物の血で清められねばならなかったのに対し、天におられる御父のまことの住まいには、あらゆる点で優れた犠牲が必要とされたのです。なぜなら、キリストが昇られたのは、天にあるものの写しにすぎない地上の神殿ではなく、私たちのために天におられる御父ご自身の御前だからです。そしてキリストはこれを一度限りで成し遂げられ、地上の大祭司のように毎年繰り返す必要はありませんでした。もしキリストの犠牲が単なる儀式であって効力のないものであるならば、天地創造の初めから世の終わりまで苦しまねばならなかったはずです。しかし今や、時代と時代の交差期にあって、つまり神の全計画がかかる中心点において、キリストは十字架の大いなる犠牲によってすべての人間の罪のために死なれ、永遠の贖いを成し遂げられたのです。人はみな肉体の死に直面し、その後、神の御前でさばきを受けます。同じように、キリストは私たちすべてのために霊的な死に直面され、再び現れて世を裁かれます。それは、主の再臨と救いを辛抱強く待ち望んでいる

私たちのためです。ですから、あなたがたの安全と助けの望みを、この世との妥協ではなく、キリストご自身に置くべきなのです。

## 第 10 章：

キリストの霊的な死こそが、御父が求められた真のいけにえであり、律法はその死を私たちのために先取りして示した影にすぎませんでした。その犠牲はいまや完全に成し遂げられた現実であり、それこそがあなたがたが救われた望みなのです。ゆえに、その望みをしっかりと保ち続けなければなりません。あなたがたが持つこの確信を、迫害からの束の間の逃れ(レンズ豆の煮物のような代用品)と引き換えに律法へと戻り、あるいはグノーシス主義の影響を受けた虚偽の教えに流されて、キリストを冒涇することは、悔い改めなければ神の裁きを招くことになるのです。

モーセの律法はキリストと、私たちが彼の身代わりの死によって受ける救いを前もって示していましたが、それ自体では救いに関して何の効力も持ってはいませんでした。もし効力があったのなら、その律法が命じるいけにえの供え物は、すでに永遠のいのちを得たという確信を持つ者たちによって、やがて捧げられなくなったはずです。ところが実際には、これらのいけにえは、それを捧げる人々に自らの罪深さを思い起こさせるものであり、これこそが律法の目的なのです([ローマ 3 章 20 節](#), [7 章 13 節](#) [[参照 ローマ 4 章 15 節](#)])。動物の血はいのちを救いません。だからこそ聖書は、救い主、すなわち、父の御心を行うために人としてこの世に来られ、自らのからだを犠牲として捧げるお方の出現([詩篇 40 篇 7-8 節](#))の必要性を預言していたのです。父の義は単なる動物のいけにえでは満たされないからです([詩篇 40 篇 6 節](#))。この宣言によって、聖書自体が影にすぎない旧き契約と動物の血を取り除き、イエス・キリストのからだと血による真実の救いの新しい契約へと置き換えているのです。私たちが聖められ、きよくされ、この世から救い出されるのは、このキリストが十字架の上で私たちのためにご自身を捧げられたことによるのであり、それを信じ、そして堅く握り続けるときに救いが成就するのです。

旧い契約のもとでは、祭司たちは絶えず動物のいけにえをささげていましたが、それらはいのちを救うことはできませんでした。けれども、私たちの大祭司はご自身をささげられ、その犠牲によって私たちは救われたのです。そしてその犠牲の効力は、御子が御父の右に座しておられるという事実そのものによって、御父の承認が与えられていることが証しされています。私たちは今やただ主の再臨を待っているのです——そしてそれは、妥協や霊的後退のうちにではなく、確信と忠実さをもって待つべきなのです。旧い契約の多くの効力の無い動物の犠牲とは対照的に、私たちの大祭司はただ

一度の犠牲によって、永遠に私たちを救ってくださいました。まさに、新しい契約においては私たちの罪が赦されると聖書が言っている([エレミヤ 31 章 33-34 節](#))とおりで。そして、罪のための真に有効な赦しがすでに与えられたところには、もはや罪のためにいけにえをささげる必要などないのです——このことを、あなたがたは知っているはずで。

私たちは今や、キリストの血——すなわち、私たちの罪のために死なれた御業——によって完全に清められました。動物の血のような効力の無いものによってではありません。したがって、私たちは主に近づくことに確信を抱くべきです。なぜなら、私たちは主に属する者、すなわち「主の家」に属する者として、天にある真の至聖所への道が、私たちの真の大祭司による十字架での犠牲を通して、すでに開かれているからです。私たちは今、救いに関して絶対的な確信を持つことができますし、またそうすべきです。なぜなら、私たちが清められたのは、動物の血でも儀式的な水でもなく、キリストの血(すなわち私たちの罪に対する刑罰を彼が支払われたこと)と、御言葉の水(私たちが信じた福音)によってだからです——これこそが私たちの良心を清めたものであり、律法のいけにえではありません。私たちは、自分が告白し、信じたことを、永遠のいのちに対する絶対的な確信をもって、堅く保ち続ける必要があります。神は決して、信仰において耐え忍ぶ者に対して、約束に背かれたことはありません。また、道から逸れかけている他の兄弟姉妹たちに対しても、キリストにある愛と、それが促す奉仕を保つよう思い起こさせるべきです——それを失うことは、信仰からの漂流の兆候であると、すでに([ヘブル 2 章 1 節](#))述べたとおりです。これらを成し遂げるためには、恐れや倦怠のゆえに他の信者たちとの交わりを避けるような者たちの習慣に倣ってはなりません。むしろ、互いに真理に堅く立つよう励まし合い、真理によって互いに仕え合うべきです(理由がどうであれ、交わりを避けていてはこのような働きは不可能です)。なぜなら、キリストは間もなく再び来られるのですから([テトス 2 章 13 節](#)参照;[マタイ 24 章 43-51 節](#)参照)、私たちはその祝福された希望を待ち望む生活をすべきなのです。

私たちはすでに、律法の犠牲が今や廃れ、そもそも真に効力あるものではなかったことを証してきました。では、この真理を意図的に無視し、いまや廃された律法にあえて立ち戻る者は、何を当然の結果として刈り取ることになるのでしょうか。——それはただ、恐るべきさばきにほかなりません。そのような行為は、卑しむべき臆病な不信仰のあらわれだからです。結局のところ、あなたはこの罪のために動物の犠牲をささげることなどできないのです。というのも、十字架がすでに起こった今になってなお動物をいけにえとしてささげ続けること自体が、まさに**罪そのもの**だからです！ 旧い契約のもとにとどまろうと望むあなたがたは思い出すべきです。劣った、そしてすでに置き換えられた律法を犯したことでさえ、きわめて厳しい即時のさばきが下ったのであれば、あの無力な儀式に立ち返ることによって、事実上キリストとその犠牲を足蹴にし、私たちのために彼が成し遂げてくださったことが無効であったかのように示す者には、どれほどいっ

そう厳しい刑罰が科せられか考えてみてください。これは、あなたがたを救った十字架を冒瀆するに等しいのです。聖霊と神の恵みを侮辱することです。その結末がどのようなものであるか、私たちはすでに知っています——すなわち、最初から御言葉を拒んだ者たちが火の湖に定められているということを。[\(マタイ 12 章 31 節\)](#)。

父なる神は復讐を御自身の特権とされているではありませんか。御自身に属する者をさばかれると仰せられているではありませんか——つまり、それはあなたがたのことではありませんか。このように神を試みる者にとって、そのさばきの御手に落ちることがいかに恐ろしいことであるか、あなたがたは理解していないのですか。これはあなたがたが以前に歩んでいた道ではありません。かつて、世の光であるお方の光を初めて見たとき、あなたがたは妥協することなく、あらゆる苦難に耐え抜いたではありませんか。そして私はそれをよく知っています。なぜなら、その迫害の多くを課したのは、ほかならぬこの私自身だったからです。…あなたがたは、試練と患難、そして嘲りとそしりの中で公然とさらされながらも、キリストに背を向けることはありませんでした——復活と、この地上のいかなるものにもまさる報いを待ち望んでいたからです。そして、あなたがたはまことに正しくそのように行動したのです。だから、どうか今になって救いの確信を投げ捨て、これまで耐え抜いてきたすべてを無にしないでください。むしろ信仰を貫き、何があっても神の御心を行い続けるべきです。そうしてこそ、かつてあなたがたにとってすべてであった約束された報いと復活とを受けるのです。それは律法へと戻ることでもなく、また神秘的な解釈に耽ることでもありません。聖書はこう語っています([ハバクク 2 章 3-4 節](#))：「私たちが待ち望んでいるもののために待つ時間は、永遠と比べればほんのわずかにすぎない。主は必ず来られる——あなたがたの思うよりも早く。信仰によって義とされた者は、その同じ信仰によって永遠のいのちを受け継ぐ。だが、もし信仰から離れるなら、主はその者を御自身のものと認められない。」しかし、兄弟たちよ、私たちは決して信仰を捨てて滅びに向かう者ではなく、信仰を貫いて永遠のいのちに至る者であると、私は確信しています。

## 第 11 章：

信仰とは、神のご計画全体を支える土台であり、それは旧約の数々の信仰の勇者たちによって証しされています。

私たちはすでに、救いに至るまで忍耐する者の決定的な特質が「信仰」であることを確認しました。では、その「信仰」とは何でしょうか。信仰とは、私たちが望みを託している事柄——すなわち復活と永遠の報い——が必ず実現するという確信を与えるものです。つまり信仰は、まだ目には見えない事がらを、私たちにとっては確かな現実として

「証言する」ものです。旧約に登場する大いなる信仰者たちは、まさにこの信仰が試され、称賛を得ました。というのも、神に対する信頼こそがクリスチャン生活の核心であり、いかなる状況にあっても神を信じ抜くその信仰の深さが、その人に与えられる賞讃と報いの大きさを決定するからです。世はこれ信じませんが、私たちは、聖書がそう語っているので、信仰によって知っています—この全宇宙は自然の力によってではなく、神によって瞬時に、超自然的に創造されたのだと。

アベルの信仰は、動物をささげることによって示されました。すなわち、彼は救い主の必要を理解していたのです。彼は神が命じられたとおりに行いましたが、カインはそうではなく、神の御心を顧みず自分の思いのままに行ったのです。前者こそ真の義であり、それは神を信じ、神が望まれることを、たとえ自分の感情や他のいかなる要素であろうとも従順に行うことです——まさに、あなたがたエルサレムの者たちがなすべきことです。アベルのような信頼、信仰、忠実な従順こそ、この世を超えて永遠のいのちに至り、やがて報いを受けることになるのです。だからこそ、神の道ではなく自分の道を行ったカインのようであってはならないのです。

エノクの信仰は、この世においてかつて一度もなく、また二度と起こらない特別な世からの去り方——死を経ずして移されるという出来事——をもたらしました。もし私たちが主を信頼し、御心にかなうならば、あらゆる驚くべきことが可能となるのです。結局のところ、私たちの主が私たちに望んでおられるのは、信仰による応答です。つまり、目に見えるもの、耳に聞こえるもの、感じるものよりも主を信頼し、この地上で主に忠実に応答して歩むことによってその信仰を示すことです。そうすれば、私たちは真に重要な霊的な事柄において妥協することなく、主が私たちに祝福し、守ってくださると信じることができます(今、エルサレムであなたがたがしているようにではなく)。主は、ご自身に救いをゆだねて信頼する者に報いを与えてくださいます。それは今この世においても、また私たちの想像をはるかに超えた永遠の報いにおいてもです。これらの真理を信じることは、私たちの信仰を強め、この世のあらゆることに立ち向かう力となり、(疑い、不信、そして不従順という悪循環とは対照的に)信仰と従順がさらに信仰と従順を生み出す「祝福の良い循環」を形づくります。

ノアは、主が彼に警告されたことを自分の目で見ると前から信じました。その従順な信仰の結果として、神の義を受けることになり、私たちがキリストを信じることによって義とされるのと同じように、ノアも永遠の救いを得ました。そして彼は洪水から現世での救いを受けました。しかし、真理に対して信じることも応答することもしなかった世界は、完全に罪に定められて滅ぼされました——当時は地上における裁きとして、そして最終的には来たるべき裁きにおいて永遠に。

アブラハムは主に従い、それまで慣れ親しんだものを後にして、見知らぬ地へと旅立ちました——彼が主を信頼していたからです。従順と信仰、信頼と忠実とは、常に表裏一体なのです。彼もまた、その後の家族も、この一時的な世に根を下ろすのではなく、寄留者として生きることを良しとしました。なぜなら、彼も彼らも、主がこの世のどんなものにもまさる永遠の報いを備えておられることを信じていたからです。

サラもまた、主が約束されたことは真実であると信頼しました。その結果、彼女とアブラハムは、すでに人間的には到底不可能と思われる年齢をとうに過ぎていたにもかかわらず、長く待ち望んだ子を授かったのです。こうして、不妊と不可能の只中から、数えきれないほどの子孫が生み出されたのです。

彼ら大いなる信仰者たちは、私たちが従うべき模範として立っています。彼らもまた、私たちと同じように復活と永遠の報いを待ち望んでいましたが、そのどちらも生きている間に実現することは一まだ一ありませんでした。しかし彼らは、それらを信仰の目で見、心から迎え入れました。自分たちがいずれ肉体の死を通らねばならないとしても、神が必ずその時に成し遂げてくださると信頼し、その信仰によって彼らの生涯を締めくくったのです。彼らは皆、旅人の心構えをもっていました。すなわち、この現世には何の執着もなく、復活と永遠の報いをこそ、待ち望んでいたのです。彼らは悪しき者の支配するこの世にあっては寄留者であり、異邦人であることを受け入れ、行動によってもそれを証明しました。妥協してこの世を幸福の場と見なすことなく、神が備えてくださる相続——天から下ってくる嗣業の地、都、新しいエルサレム——をひたすら望んだのです。もしそうでなかったなら、彼らは簡単に自分の出てきた場所に引き返し、古いものに戻ることができたはずですが。——ちょうど今のあなたがたが、主と共に前へと進み続けることをせずに、後ろへと退いてしまっているように。これらの信仰者たちは神を喜ばせました。ですから神は彼らを恥じることはなく——あなたがたが今、主に恥をかかせるような振る舞いをしているのとは対照的に——、神はすでに彼らのために、そして「多くの住まいがある」([ヨハネ 14 章 2 節](#))と語られた新しいエルサレムにおいて、素晴らしい住まいを備えてくださっています。そしてもし私たちも、この戦いに疲れて途中で投げ出すことなく歩み続けるなら、その住まいは私たちのためにも用意されているのです。

アブラハムは、その最愛の子、すなわち神が彼に約束されたすべてがかかっていたその子を犠牲にせよとの命を受けたとき、神を信頼し従うことによって、信仰の力を私たちに示しました。神が命じられた以上、必ず良きものにしてくださると信じたのです([ローマ 8 章 28 節](#)、[創世記 50 章 20 節](#)参照)。たとえそれがイサクを死からよみがえらせることを意味したとしても、神はそれを成し遂げられると信じたのです——そして、あ

る意味では、まさにその通りでした。最後の瞬間にその命が救われたことによって、神は実際にイサクを死から取り戻されたのです。イサクはキリストを象徴しており、私たちのために救い主が死んでくださることを示していました。ところが今やキリストはすでに私たちのために死んでくださったのに、あなたがたはもう果たされた勝利を、まだ先のことのよう儀式で繰り返そうとしているのです。私たちは、むしろアブラハムのように、「たとえどんな状況であっても」主を信頼すべきです。この出来事の中に、神の恵みの深さと、神を信頼することの祝福と益とを見ることができます。たとえ目に見えるもの、耳に聞こえるもの、心に迫る感情や不安な思い、さらには人々の声が「信じるな」とささやいたとしても、なお神を信じ抜くことが求められているのです。

イサクは、長子が弟に仕えるという預言が与えられていたにもかかわらず([創世記 25 章 23 節](#); [ローマ 9 章 12 節](#)参照)、自分に与えられた息子たちへの祝福の約束が確かだとして揺らぐことのないものと固く信じていました。だからこそ、彼はヤコブではなく自分の好んだエサウを祝福しようとしたのです。しかし、彼は信仰によって知っていたのです——神の御言葉は必ず成る、と。そして実際、その通りになったのです。

ヤコブもまた、神から与えられた子らに関する預言が必ず成就することを絶対に信じていました。そのため、彼は人生の最期に力を振り絞り、主を礼拝しながらその確信を証したのです。

ヨセフもまた、イスラエルの民がエジプトから救い出されるという神の預言を全く疑いませんでした。彼は、自分の埋葬がそこ(エジプト)においては一時的なものであるようにと明確に指示を残し、イスラエルの民に対して、将来の「約束の地の嗣業」を示すしるしと象徴にしようとしたのです。

モーセの両親もまた、主の善と憐れみに十分な信頼と信仰を置いて、自分たちの幼い子どもを守ろうとしました。神がこの子に特別なご計画を持っておられることを見抜き、それを信じ、危険を顧みずに正しいことを行い、神に委ねたのです。

モーセは、安定や富や権力に満ちた人生よりも、見えないもの、すなわち主とその御業を選び取りました。彼の目はこの世にではなく、常に主に注がれており、どのような状況でも主を信頼し続けたのです。モーセは神が命じられたとおりに正確に従い、神を畏れ敬ってその御言葉が真実であると信じました。その結果、最初の過越のときにはイスラエルの長子は守られましたが、エジプトの長子たちはみな打たれて滅んだのです。

イスラエルの民は、神が紅海に開いてくださった道を信仰をもって渡り切りましたが、信仰を持たなかったエジプト人は同じ試みをして滅ぼされました。しかし、危機を乗り越えたあと、私たちの先祖はすぐに心の中でエジプトに戻ってしまったのです……ちょうど今のあなたがたがそうしているように。それは、以前に苦しみに耐え抜いた経験があるにもかかわらず、なおも信仰を離れて後ろへ戻ろうとしている姿です。次の世代は、神がお命じになったとおりに、七日間、エリコの城壁を回り続けました。人間的な視点ではまったく意味がないように見える行動でしたが、その結果、彼らが何の力も振るわないうちに、その地で最強の防御が崩れ落ちたのです。七日間回り続けても何も起こらなかった……しかし、ついに神の時にそれは起こりました。同じように、あなたがたも肉の目には理解できないことがあっても、忍耐して信仰にとどまらなければなりません。そうすれば、神は必ずご自身の良い、そして完全な時に、あなたがたのために働いてくださるのです(七という数字は神の完全な時を象徴しています)。

ラハブの姿は、神が人を分け隔てなさないことを私たちに示しています。だれであっても神に信頼を置くなら、決して失望することはありません。ラハブは信仰によって自分の命だけでなく、家族全員の命までも救いました。

私は過去のすばらしい信仰者たちのことを、彼らがどれほどのことを成し遂げ、どれほど苦しみながらも信仰を失わなかったかについて、長く語り続けることもできます。あなたがたも苦しみを経験してきましたが、彼らはさらに深刻な苦しみを耐え抜き、それによってこの世よりも優れており、この世にふさわしくない者たちであることを示しました。それでも彼らは、この世を去るときになっても、自分たちが信仰によって望み、神からの相続財産として確信していた復活と報いを受けることはありませんでした。彼らがそれを受けなかったのは、もし彼らだけが先に受けてしまえば、私たちがその分を失うことになったからです。神はキリストが教会を迎えに来られる時まで、キリストの花嫁なる教会全体が完成するのを待っておられるのです。その時、彼らも私たちも、その時までに信じるすべての者も一つのキリストのからだとして共に復活し、空中で主を迎え、永遠にひとつとされるのです。これこそがまさに「さらにすぐれたもの」であり、あなたがたの中のある者たちが永遠の相続財産を安っぽい一杯の煮物と引き換えにしようとしているものとは比べものにならないほど、はるかに尊いものなのです。

## 第 12 章:

神の懲らしめは軽んじるべきものではなく、むしろ正しく応答すべきものです。その懲らしめに応じなかったときに生じる悲惨さは、新しい契約における恵みとあ

われみと、古い契約における恐るべき刑罰との対比によって示されています。私たちは、揺るぐことのない天のシオンの山、決して動かされることのない神の国をこそ選び取るべきです。

あなたがたが信仰を欠き、過去の偉大な信仰者たちの足跡を歩もうとしなかったことによって、間違いなく今、主からの懲らしめを受けているのです。自分の苦しみ、自分の取った誤った行動のせいであると認めるのはつらいことに違いありません。しかし、そのように反発してはいけません。神の懲らしめの目的は、あなたがたを悔い改めへと立ち返らせ、かつて持っていた信仰と信頼と従順に戻らせるためなのです。ですから、神からの叱責にどう応答しているのかを改めて考え直し、へりくだる必要があります。あなたがたに求められているのは、過去の偉大な信仰者たちの模範に従い、彼らが私たちを見守っていることを心に留め、この罪——一方では律法に逆戻りし、もう一方ではグノーシス的な幻想を追いかけるといふ罪——を捨て去ることです。そして、その代わりに再び走るべき道に戻り、レースに勝利するために全力を尽くすべきなのです([第一コリント 9 章 24-27 節](#)参照)。

イエス・キリストに目を注ぎ続けてください。主は私たちの模範であり、私たちが救われる理由であり、また私たちが救いを信頼するお方です。主がなさったように、余計なものを一切顧みず、報いに目を注ぎ続けてください。主は耐え難いもの——十字架——を耐え抜かれ、その結果として「すべてに勝る勝利」を得られました。その勝利は、父の右の座に着かれたことによって証明されています。主が成し遂げられたことに比べれば、私たちがすべきことはごく小さなことにすぎません。キリストは私たちの罪のために苦しみ、死んでくださいました。それに応えて、私たちも主の望まれる道を歩み、信仰を持って従っていくのです。また、十字架にかかる前にも、主はあなたがたが直面しているような反対に耐えられました—私たちが今理解できるよりはるかに大きな反対でした。ですから心が疲れ果てて落胆してしまわないように、主の足跡に従っていく決意を固めなさい。あなたがたは、まだこの罪(律法への妥協やグノーシス的な行き過ぎ)に対して、然るべき抵抗をるところまで戦っていません。そして、その結果として受けている神の懲らしめによって気落ちしてしまいました。しかしそれは、あなたがたが悔い改めと告白をしていないからです。忘れてはいけません。この懲らしめはすべて、あなたがたの益のためであり、正しい道に立ち返らせるためのものなのです。聖書もそのことを証言しています([箴言 3 章 11-12 節](#))。

あなたがたが今受けているこの懲らしめを、正しく、そして敬虔な態度で耐え忍びなさい。それを受け入れ、罪を告白し、悔い改めるのです。あなたがたは、すべての良い父親が自分の子に与える矯正と同じように、天の父からのしつけを受けているのです。父のない者だけが父の懲らしめを欠きます。私たちは皆、不完全でありながら最善を

尽くして私たちを罰した地上の父から矯正を受け入れたのですから、なおさら完全なお方である天の父からの完全な懲らしめを受け入れ、正しく応答すべきではないでしょうか。その懲らしめは、正しく応答するなら、死から救い出すものです(「死に至る罪」や背教からの救い)。このようにして神の懲らしめに正しく応答するとき、私たちは聖められ、罪や悪から引き離され、再び神と、そして救い主イエス・キリストとの交わりに回復されるのです([ヨハネ第一 1 章 1-10 節](#))。

すべての訓練は、正しく受け止め、ふさわしい態度で臨み、真の改善につながるなら、特に霊的な領域において素晴らしく、必要な実を結びます。もっとも、それを受けている時には、決して楽しい体験ではありません。ですから、競技から外されてしまったのをさらに悪化させるのではなく、負った傷を癒し、進むべき道を正して再び走り出さない。そして、世界中のすべての兄弟姉妹と共に、日ごとに、時ごとに、主イエス・キリストとの交わりにある平安を追い求めなさい。すなわち—信仰を前進させる積極的な実践(自らの十字架を担うこと)と信仰を守り保つための堅固な備え(自分を否むこと)の二つを持って罪や悪を退けなさい。なぜなら、これらの妥協(律法への逆戻り)や放縦(グノーシス的な逸脱)を退けなければ、背教や「死に至る罪」に陥る危険があるからです。救われているのは信じている者たちだけであり、主が再び来られる日に御顔を仰いで喜ぶのも、彼らなのです。

あなたがたすべては、この事柄において神の恵み、すなわちその愛と赦しを受け取るよう、真剣に努めなさい。すなわち、神に立ち返ることによってです。さもなければ、あなたがたが好んで頼ろうとしているすでに廃れた律法に示されているように、たとえ一人から芽生えたものであっても多くを汚す偶像礼拝という苦い根が、あなたがたを待ち受けているのです([申命記 29 章 17-19 節](#))。そして今あなたがたがしていることは、実質的に廃れた律法や、それを仲介したにすぎない天使たちを偶像化しているに等しいのです。性的な罪からは、特に明確な理由のゆえに、遠く離れていなければなりません。聖められ、聖い者とされるはずの者が、そのような罪に関わることはできないのです([第一コリント 6 章 18 節](#); [第一テサロニケ 4 章 3-8 節](#)参照)。また、グノーシス的な享樂にふけることもまた偶像礼拝です。かつてあなたがたが努力し、苦しみ、犠牲を払ってきたすべてを、一杯のレンズ豆の煮物(=つまらない一時の快樂)と引き換えにしてはなりません。エサウがそうしたようにです。悔い改めがなければ——あなたがたがいまなおためらっているその悔い改めがなければ——いったん失った長子の権利を取り戻すことは不可能なのです。

あなたがたがイエス・キリストにおいて近づいたのは、あの恐ろしいシナイ山ではありません。あれは律法に結びついた恐怖の場であって、私たちの救い主における神の恵みに結びついた場ではありませんでした。それは新しい契約ではなく、古い契約の

場だったのです([ガラテヤ 4 章 21-31 節](#)参照)。なぜあなたがたは、当時すべての民の心を恐怖に陥れ、さらにはモーセ自身でさえ震えさせた、あの恐ろしい場所へと戻りたがるのですか。イエスにおいて、あなたがたは天のシオンの山、私たちの永遠の住まいである新しいエルサレムに来ているのです。そこは父と子が住まれ、選ばれたすべての御使いたちと、私たちより前に召されたすべての聖徒たちがともにいる場所です——そしてあなたがたも、いまは背を向けてしまっているとはいえ、なおその教会の一部なのです。そこに私たちの主がおられます。地上のシナイ山ではなく、天のシオンの山にです。主こそが、私たちの救いのために父が私たちの代わりに結ばれた、新しく、より優れた契約の仲介者なのです。それは、私たちが神の恵みにより、御子が私たちのために信仰を通して十字架で犠牲となられたことによって救われる、という契約です。その血によって——すなわち動物の血ではなく、キリストの血によって——、私たちは「注がれ」、罪から清められ、救われたのです。あなたがたが愚かにも戻っている動物の犠牲のような、文字通りの血は何の効力もありません(「犠牲」と呼ばれる律法無視の秘教的な行いも同様です)。キリストの犠牲はあらゆる点で優れており、それは実際に救いを成し遂げたのです。それは歴史上のすべての動物の犠牲にまさり、アベルのものから始まり、無限に超越しているのです。

ですから、この手紙にある警告の言葉を、また今あなたがたが受けている懲らしめを、さらに聖霊を通してあなたがたを責めている良心の痛みを、決して無視してはなりません。あなたがたの中には、誤って解釈された律法のもとに生きたいと望んでいる者がいます。しかし思い出してください。律法に背き、悔い改めを拒んだ人々は、あなたがたが今しているように、地上での警告を受けても逃れることができませんでした。けれども、あなたがたへの警告は、書かれた神の言葉であり、また生ける御言葉であるイエス・キリストご自身から、すなわち天から直接与えられているのです。どうか、この方をなおも無視し続けるなら、逃れることができると思わないでください。

シナイ山において、神はイスラエルの民に御自分に従うよう警告されたとき、その声で地を揺り動かされました([出エジプト記 19 章 18 節](#))。さらに後には、天と全地そのものを揺るがす時が来ると語られました。それは、この物質世界のことを意味しています。この世はやがて過ぎ去るものだからです。その一時的な世界こそ、律法が関わっていたものでした。しかし私たちは、もはや揺り動かされることのない新しい天と新しい地を待ち望んでいます。ですから私たちは真理を受け入れなければなりません。すなわち、もはや終わった律法の誤ったやり方ではなく([ローマ 8 章 2 節](#))、また単なる天使についての空想に心に向けるのではなく、御霊による正しい方法で神を礼拝するのです。私たちは、将来を指し示すに過ぎなかった過去の古いものから離れ、感謝をもって真理を受け入れ、霊的成長と前進と実を結ぶことによって神に正しく仕え、敬虔な恐れと

畏敬の念をもって、キリストにある信者である私たちに与えられている現在と未来の祝福に目を留めるべきです。その一方で、神から背を向けるすべての人々に残されているものは、神の裁きの火だけであることも忘れてはなりません。

## 13 章:

結びとして、エルサレムの信徒たちに改めて申し上げます。あなたがたは一方ではグノーシス主義とその不名誉な行いから遠ざかり、他方では律法のただの影にすぎない儀式に逆戻りするのではなく、それらをすでに成就されたお方、キリストに従うべきなのです。

あなたがたはこの危険な妥協を続けるのではなく、主イエスを愛さない者たちと交わるよりも、むしろ兄弟たちを愛することに力を尽くしなさい。あなたがたが天使に関心を抱いているのなら、聖書はかつて、困窮する兄弟を受け入れた者たちが、実は選ばれた天使をもてなしていたことを伝えているではありませんか。そのことを思い起こしなさい。また、信仰ゆえに獄にある人々を忘れてはなりません。これもまた、あなたがたが愛を示すべき重要な務めだからです。

改めて強調せざるを得ないのは残念ですが、性的な不従順はあらゆる霊性を破壊するものである、という事実です(しかし、あなたがたに関して私が受け取った報告が、このことを再び指摘せざるを得なくさせています)。ですから、この点に関してグノーシス主義者たちが語っている虚偽を決して受け入れてはなりません。彼らはそのような罪深い行為を、欺きの言葉でもって正当化しているのです。また、生活の安定への不安に駆られて、すでに廃れた律法との妥協に陥ってはなりません。あなたがたが社会から締め出されることで苦難に直面していること、それがあなたがたの後退の大きな理由の一つであることは承知しています(思いだしてください、艱難期にはこの圧迫はさらに大きくなるのです)。しかし、神は私たちを決して見捨てることはありません。私たちが信頼し、主の救いを待ち望むならば、必ず助けてくださいます。聖書もそう語っています([申命記 31 章 6-8 節](#); [ヨシュア記 1 章 5 節](#))。この神の絶対的な真実さを信じるならば、私たちは目に見える状況よりも、この現実を確信できるのです。すなわち、主こそ我らを助ける方であり、私たちは何も恐れる必要はないのです。聖書もまたそう明言しています([詩篇 118 篇 6 節](#))。

また、神の御言葉の真理を教えている者たちに対して、従順であることを忘れず、圧力をかけたり、脅したり、威圧したりしてはなりません。彼らが示している信仰を思い起

こし、神が従う者を必ず祝福されることを覚え、それを実際に見て学び取りなさい。イエス・キリストこそ古い契約の背後にある真理です。イエス・キリストこそ、私たちが今や信仰によって立っている新しい契約を仲介してくださったお方です。そしてまた、イエス・キリストこそ、やがて来る大いなる日に、私たちがその御前に立たねばならないお方なのです。これこそが、私があなたがたに語ってきたすべての要点なのです。ところが、あなたがたは真理に背を向け、変わることをしないお方([ヤコブ 1 章 17 節](#))、そして真理そのものであられるお方([ヨハネ 14 章 6 節](#))から離れてしまっているのです。

結局のところ、私たちの心が霊的に成長するのは、神の御言葉の真理によるのであって、いまや無縁であるべき儀式における犠牲の肉を食することによってでもなく、あるいは「知識」と名ばかりの不法な儀式にふけることによってでもありません。ですから、すでに効力を失った律法の儀式からも、また、あなたがたの中のある者が耳を傾けて関わってきた、天使やアイオーンについてのグノーシスの教えといった危険な虚偽の教えからも、遠ざかりなさい。そのいずれからとも何の益も得られないのです。

しかし、私たちがキリストの備えてくださった「祭壇から食べる」ことには大きな益があります。つまり、それは御言葉の真理であり、それを「食べる」とは、食物を取るのと同じように、信仰によって受け入れ、信じることを意味しているのです。新しい契約と古い契約とを一十字架という実体と、あなたがたが戻ってしまった儀式の影とを比べてみてください。古い契約においては、贖罪の血が流される罪祭の場合、その肉体は宿営の外で焼かれました。これは、十字架とキリストの血とを前もって指し示すものでした。ですから、イエス・キリストもまた城門の外で苦しみ、私たちのために死なれました。それは、私たちの罪のために死ぬことによって私たちを罪から救い、私たちを聖なるものとして父なる神と御自身に属する者とし、罪と死と裁きから解放放つためだったのです。そうであるならば、仲間外れにされないために妥協するのではなく——それはこの世において一時的にわずかな安らぎを与えるだけで、永遠においては大きな代償を伴うものです——むしろキリストへの信仰がもたらすかもしれない排斥を喜んで受け入れるべきです。私たちは「外に出て」、偽りの交わりや妥協に満ちた宿営／都／門の内側から離れるべきです。なぜなら、イエス・キリストは内側ではなく、外におられるからです。

私たちは、この世に一時的に生かされてはいますが、この世に属する者ではありません([ヨハネ 17 章 14 節](#))。私たちが目を向けているのは、より優れたもの、すなわちこの世のすべてのもののようには滅びゆくものではなく、永遠に天において存続し、やがて地に下る神によって造られた都なのです([黙示録 21 章 1-2 節](#))。動物の犠牲による儀式的なさげものではなく、真実で、実質的で、心からの霊のささげものをささげようではありませんか。すなわち、神を賛美し、感謝をささげ、兄弟姉妹に分ち合い仕えることです——これこそが神に喜ばれるささげものであり、もはや廃れて神にとって忌ま

わしいものとなった動物の犠牲や、人間が作り出したグノーシス的な「いけにえ」ではないのです。

もう一度、強調して言います。あなたがたは、真理を語ることを妨げようとして、自分の教師たちを威圧してきました。そうではなく、彼らに耳を傾け、その教えを受け入れて従わなければなりません。彼らはあなたがたを助けようとしているのですから。それこそが永遠における良き報いを得る道、すなわち彼らの助けを得て真実な霊的成長に励むことなのです。今のままの態度を続けるならば、キリストの日に彼らがあなたがたについて悪く報告せざるを得なくなり、その結果、報いを失うことになってしまいます。

また、あなたがたの祈りをも願います。人がどう思おうとも、私は常に主の御前で正しいことを行うよう努めてきました。どうか私のために祈ってください。そうすれば、私があるあなたがたの心に再び受け入れられることとなり、それはあなたがた自身にとって益となるのです。

私たちが仕え、愛しているお方、そして私たちのために何をしてくださったかを思い起こしなさい。すなわち、私たちを御自身との平和へと召された父なる神(あなたがたのふるまいはむしろ混乱をもたらしています)、そしてイエスを死人の中からよみがえらせてくださった父なる神——私たちの希望は、この世のいかなるものでもなく、復活にあるのです。ところが、あなたがたの歩みは、その永遠のいのちを保つことを危うくしています。そして、私たちの愛する主ご自身が、私たちの牧者です。私たちが主に従うならば、必ず主は私たちを養い守ってくださいます。この新しい契約を備えてくださったのも主です。その契約には、死に渡された御からだと御血によって贖われた、すばらしい将来の約束がすべて含まれているのです。十字架の闇の中で、私たちの罪のために実際にささげられたその犠牲によって、いまや私たちは永遠のいのちを持つのです。これらのことを深く心に刻みなさい。そうすれば、神はあなたがたを再び霊的に成長させ、かつての姿を回復させ、さらに前進させて、豊かな実を結ばせてくださいます。それは、イエス・キリストにあって報いにふさわしい収穫となり、主の栄光がとこしえにあらわされるためなのです。

この手紙は長く思えるかもしれませんが、実際には、言うべきことを多く抑えてきたのです。私がここに記したすべては真実であり、たとえ時にあなたがたの気持ちを傷つけたとしても、それを受け入れることはあなたがたにとって益となるのです。

知らせをひとつ: テモテはすでに釈放されました。ですから、もしあなたがたが十分に早く来ることができるなら、彼は私がいまローマで拘束されている場所へあなたがたを連れてくることができるでしょう。あなたがたの教師たちによろしく伝えてください(ま

ず最初に彼らに挨拶を送るのは、あなたがたが彼らにふさわしい敬意を払うべきだからです)。また、ほかのすべての信徒たちにもよろしく伝えてください(ただし、ここに名前を挙げると、この手紙が彼らを迫害する手段として用いられてしまうかもしれないので、あえて名は記しません)。ここローマにいる者たちも皆、あなたがたによろしくと言っています(同じ理由で、こちらの者たちの名も記しません)。私は、神の恵みがあなたがたにあるようにと祈ります——それは理論的にも实际的にも、もしあなたがたが心から主に立ち返るなら確かに与えられるものです。私は、ここに書いたすべてのことを、揺るぎない確信をもって信じています。

## 結論：

多くの点において、ヘブル書が記された当時にエルサレムの信徒たちが直面していた試練は、今日の信徒たちが直面しているものと類似しています。エルサレムにこの書簡が届けられてからそう遠くないうちに、ユダヤは属州全体の反乱に対する報復としてローマ軍に侵攻され、主ご自身が預言された通り([ルカ 21 章 20-24 節](#))、エルサレムは包囲されました。その地の住民の多くは、戦いの初期に安全を求めてエルサレムへと退いたものの、包囲が激化し、食糧が尽きるに従って状況は悪化の一途をたどりました。最終的な破局は西暦 70 年に訪れ、幾月にも及ぶ戦闘の末に火と剣による死が襲いかかり、わずかに生き残った者たちの多くも奴隷とされました。ユダヤ全土やエルサレムにいた信徒たちのうち、このパウロの手紙を実際に読み、あるいは読んでもらった人々がその後どうなったのか、私たちには知るすべがありません。しかし確かなことは、主はご自身に属し、注意深く従っている者たちと、そうではない者たちとを、異なる仕方で扱われるということです。

上記で引用された箇所([ルカ 21 章 20-24 節](#))は、ローマ軍によるエルサレム包囲と、艱難期の間時における反キリストのエルサレム占拠との双方に適用される二重の意味を持っています。注目すべきは、この手紙が最初に公表された時代と、私たちがいま立っているラオデキヤ時代の末期とのあいだに、時間的な位置の上で驚くほどの類似があるということです。その時も今も、神の民は例外こそあれ、大部分においてイエス・キリストが望まれる歩みをしてはいませんでした。今日のラオデキヤ時代における「目に見える教会」には、二つの同様の傾向が見られます。一方では、ローマ・カトリック教会に特徴的な儀式や形式主義(律法)へと回帰しようとする傾向があり、他方では、音楽的・感情的演出の過剰に身を委ねる傾向(グノーシス主義)があります。律法主義と放縦主義というこの二重の傾向は、パウロが本書簡において取り扱っているエルサレムの状況と、不気味なまでに似通っているのです。

両者に共通するのは——過去の歴史的事例と、私たちが直面している現在の状況のいずれにおいても——そうした態度や行動が霊的成長を阻むものであり、その結果、当時の信者たちは起こるべき事態に備えることができず、そして今の私たちもまた、間もなく迫ろうとしている事態に備えられなくなっている、という点です。ただし、今日における大きな相違点はこうです。すなわち、当時のようにローマ軍が一国を侵略する(そのため、パレスチナにいた一部のユダヤ人信者たちは避難の可能性があります; [ルカ 21 章 21 節](#)参照)のではなく、反キリストの支配は全世界に及ぶため、逃げ場は存在しません(イスラエルのユダヤ人信者で、警告に従って避難する者たちは除きます; [黙示録 12 章 13-16 節](#))。これからの艱難を生き抜くよう定められている私たちは、イエス・キリストに従うことを決意していない者たちすべてから——不信者だけではなく、弱い信者、バックスライドした信者、妥協する信者、名ばかりの信者たちから——徹底的に疎外されることになるでしょう。ラオデキヤ時代は、そうした人々で溢れかえっているのです。この「社会からの拒絶」という圧力に加えて、律法主義的な性向をもつ者たちにとっては強く魅力的に響き、またその正反対に生き、享樂を追い求める者たちにとっても魅力的に響くであろう「獣の宗教」の力強い誘惑が加わります。それゆえに、霊的に成熟して信仰にしっかり立っていない限り、最後まで耐え忍ぶことはきわめて困難となるのです——そして、「最後まで耐え忍ぶ者こそ救われる」([マタイ 24 章 13 節](#))のです。

ヘブル人への手紙が、果たして意図された効果をもたらしたのかどうか、私たちには知ることができません。パウロ自身も、余命いくばくもない時であり、最後の結果を見ることは許されませんでした。ただし、彼が生涯を閉じる前に訪れるよう勧めた人々から、その反応の一端を知らされた可能性はあるでしょう。しかし私たちが確かに言えることは、この手紙が、心に届いたすべての人にとって、命綱となる救命具のようなものであったということです。それは彼らを霊的な眠りから揺り起こし、手遅れになる前に立ち返らせるために与えられたもの——すなわち、主から離れて誤った方向へ進んだ結果が現実のものとなる前に悔い改めへと導くためのものでした。同じ選択は、今日のラオデキヤ時代のクリスチャンにも突きつけられています。艱難期の入口に立つ今、このヘブル人への手紙は、必要としているすべての人にとって格好の「霊的覚醒への警鐘」となり、受け入れる意志のある者にとって大きな祝福をもたらします。そしてまた、たとえ何が起ころうとも、信仰をキリストのうちに堅く保ち、「終わりまで堅く立つ」([ヘブル 3 章 6 節](#), [3 章 14 節](#))ことを決意している私たちにとっても、きわめて価値あるものなのです。

(10)またわたしに言った、「この書の預言の言葉を封じてはならない。時が近づいているからである。(11) 不義な者はさらに不義を行い、汚れた者はさらに汚れたことを行い、義なる者はさらに義を行い、聖なる者はさらに聖なることを行うままにさせよ」。(12) [主は言われる、]「見よ、わたしはすぐに来る。報いを携えてきて、それぞれのしわざに応じて報いよう。(黙示録 22 章 10-12 節)